

---

# Missing Hearts

七海くれは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Missing Hearts

### 【Nコード】

N14670

### 【作者名】

七海くれは

### 【あらすじ】

水嶋灯夜と水嶋音遠は、仲の良い兄妹。

彼らが見つけた一人の青年は、まさかの灯夜と瓜二つ。

真相を確かめるべく、その彼を探す2人。

その後発覚した真相が、彼らの運命を大きく変えることになる。

誰もが夢見る『Precious Melody』を捜し求める青春ストーリー。今作は、その前身。

## 本編：奇跡の出会い

「はあ……。まだ学校行かなきゃならないなんてつれえよなあ……」  
「何言ってるんの灯夜兄？ 3学期はすぐ終わりなんだよ。あと何回か学校行ったら終わりって聞いたよ？」

この日は3学期の始業式。

高校3年生である水嶋灯夜と水嶋音遠の兄妹は、学校へ行くためにいつもと同じ電車に乗り込んでいた。

もうすでにこの電車にも3年間乗り続けていると思うと、自然と感慨深くもなるものだ。

ましてやあと数回でこの路線を使う事がなくなるのだから、なおの事そんな気が強くなる。

その時、音遠が唐突に口を開いた。

「ねえ灯夜兄？ 今日学校終わったらどっか行かない？ 買い物とか、ゲームセンターとか。ね？」

「え？ 嫌だね。考えてもみろ、俺らの置かれている状況を。大学受験を控えている俺らが、そんなホイホイ遊びに行ってもいいのかわるか」

「あう……」

「冬休み遊んじまった俺にとってこれからの10日間がカギなのだ！ お前と遊んでいる暇などないのだあ！」

「え〜？ ヤダヤダあ〜！ 1日くらいいいでしょ〜？ 1人じゃ寂しいう……」

「言ってもわかんねえってか……。分かったよ、分かりましたよ！ 一緒に行けばいいんだろ？ 全く……」

「ホント？ やったー！ 灯夜兄大好きだう」

「わっ、馬鹿！ くつつくな！ 倒れるだろ！」

そう、この2人はいつもこんな感じなのである。

音遠は灯夜の事が大好きなのだが、灯夜本人は鬱陶しく思ってい

る部分がある。

それからしばらくして、2人は学校に到着した。

公立高校のためかわりと自由な校風である事と、数年前に改装工事が行われた事で、ここ数年の競争率は高水準で推移している。

実際この2人も数年前、厳しい受験戦争に勝ち抜いたのだ。

もっとも音遠の方は、どうしても大好きな兄と同じ学校に行きたかったと言う理由でかなり無謀な挑戦になったのだが。

この日は3学期の始業式のみで終わった。

教室内はまっすぐ帰る者、受験について教師に聞きに行く者、他愛のない会話を楽しむ者と様々であった。

灯夜は帰り支度をしていたが、その最中に隣のクラスから音遠がやってきた。

「お待たせー！ ねえ、どこ行こっか？」

「もう来たのかよお前。別に待ってねえけどさ。そうだな……。ちよっと早いけど飯にするか？」

「うん！ 私お腹空いちゃったう」

灯夜の帰り支度も終わり、2人は出発した。

歩いてる途中に、音遠はさりげなく灯夜の腕に自分の腕を絡ませてる。

「……だから！ 何でお前はいつもそうするんだよ！？ ざってえからもう少し離れるっての……」

「うっ……、灯夜兄がいぢめる……。うるうる」

「あのー、音遠ちゃん？ 何1人で乙女モード入ってるですかー？ 戻って来いつての……。くあーっ、疲れるなあこいつのお守りは……」

……」

それから2人は近くの商店街へと出た。相変わらず音遠は腕を灯夜の腕に絡ませたままである。

少し歩いているうちにファストフード店が見えてきたので、2人はそこで食事をする事にした。

「何にしようかな……？ この最近出来たセットメニューにしてみるかな」

「あ、じゃ私もそれー！ 灯夜兄とおんなじ」

「またこいつは俺の真似を……。まさか、組み合わせまで俺と同じにするつもりじゃねえだろうな？」

「しないよー？ だってそれじゃいろんなの食べられないじゃん」

「……じゃお前から先に頼めよ。被ったらお前の思い通りにならねえんだろ？ お前が選ばなかったのにしてやつからよ」

「ホントー？ ありがとー！ 灯夜兄優しいね……。大好きだう」

「だーからー！ くつつくなって何度言えばわかんた！ さっさと注文しやがれこの奇跡的馬鹿！ 後ろがつかえてんだから……」

「はーい てへへ……」

注文を済ませて席に着いた2人は、さっそくそれぞれの物に手をつける。

灯夜はふと、窓の外へ目をやった。すると……、自分にそっくりな男が歩いているではないか。

彼にはもちろん、その男とは面識がない。しかし、何か運命的なものを感じていた。

「灯夜兄、どうしたの？ 食べないの？」

「いや、そうじゃない。何か俺にそっくりな奴がいた気がして、目で追ってたんだけど……見失っちゃった」

「そうなの？ 灯夜兄とおんなじくらいカッコいい男の子がいたんだ……。あーあ、私も見たかったなあ」

（誰だったんだ……？ 他人とは思えなかったな、あいつ……）

翌日、午前6時。灯夜は目覚まし時計が鳴り響くよりも早く目を覚ましていた。

「音遠のヤツはまだ起きてないな……。よし、今日は一人で登校出来る！ 今日から授業開始だしな、気合入れて望まねえと……」

自分の部屋で身支度を済ませ、下の階へ降りる。

すでに母親も起きていて、2人の為の弁当を作っている途中であった。

「あら灯夜、おはよう。早いね。今日は何かあるの？」

「いや……。別に何も。ただ、早く学校に行くのも悪くないかな、なんて思ってた」

さすがに灯夜も『音遠が邪魔だから置いていく』とは言えず、とつさにもっともらしい理由をつけた。

ここの機転が利くあたり、双子の妹である音遠とは根本的に違っていることを物語っている。灯夜のこの性格は、どうやら父親似らしい。

母親も音遠の性格に似ているので、嘘をそのまま信じてしまうのだ。

もっとも彼女の性格は、この母親の性格に輪をかけたものとなっているのだが。

「そんじゃ母さん、行ってくるよ！」

そう言い残し、灯夜はひとり学校へと出発した。時間は7時10分前と、かなりの早出であった。

それと同時に、2階から音遠が降りてきた。

「お母さん、灯夜兄は？ もういないんだけど……」

「灯夜なら今さっき学校行っちゃったわよ？ アンタはいいの？ 行かなくても」

「え！？ ウソでしょお母さん！？ 何で教えてくれなかったの？」

灯夜がすでに学校に行ってしまった事を告げられた音遠は一気に目を覚ました……と同時に、起こしてくれなかった母親を責め立てた。

こんな事を言う方が愚かだというのは音遠にもわかっていたが、こうせずにはいられなかったのだ。

「私ももう行く！ 朝ごはんいらさないからよろしくね！ はうっ、急がないと間に合わないよう……」

言うが早い、身支度もそこそこに家を飛び出した。何が彼女をそうさせるのだろうか。

いくら灯夜の事が好きとは言え、ここまで動けるものだろうか。

この妹の健気な思いに気付かない灯夜は、鈍感であるとしか言いようがない。

あまり走る事は得意でない音遠ではあったが、この時は違った。

普段なら徒歩5分かかる最寄の駅に何と一分で到着してしまった。学校まではここから地下鉄を使い、3駅先の駅で降りて少し歩くのである。

登校時間は20〜30分ほどかかってしまっが、音遠はその間、大好きな兄とくっついていられるので全く苦ではなかった。

しかし、この日は違っていた。灯夜はすでに学校へ行ってしまったている。

急げば間に合うと思ひ、ここまで全力疾走してきたのだ。

一縷の望みを託し、駅周辺でそれらしき人物を探す。

すると、何て事はない。あっさりと灯夜を発見してしまったのだ。

「はあ、はあ……。あっ、灯夜兄はっけーん」

疲れも忘れ、一心不乱に彼のもとへ駆けて行く音遠。しかし……。

「……誰アタ」

「（えっ……。似てるけど違う……。）あ、ゴメンナサイ。人違いでした……。てへっ」

「逆ナンなら勘弁してくれよな。迷惑だからよ」

その男は確かに灯夜に酷似していたが、風貌は明らかに違っていた。

灯夜より若干細面で、髪は逆立っており、その色も茶色であった。

彼の髪の色は、本人が自慢するほど鮮やかな黒髪なので、間違っ  
はずはない。

そして、見るからに不良なこの男を、音遠は何故灯夜と間違えた  
のだろうか。

音遠は、灯夜の顔しか見えていないのだろうか。

結局、いくら探しても灯夜は見つからなかった。

うなだれながら電車に乗った音遠は、さっきの男の事を思い返し  
ていた。

「昨日、灯夜兄が見つけたそっくりな男の子ってあの人の事かな…  
…？ 学校着いたら聞いてみよつと」

（でも、ホントに灯夜兄に似てたなあ……。たぶん、灯夜兄をもつ  
とワイルドにしたらあーなるんだろーなあ……。はぶん、カッコよ  
かったにや）

その後、音遠のほうも学校に到着した。

すぐに灯夜の元へ駆けつけるも、彼は机に突っ伏して爆睡してい  
たのだ。

「もーう！ 何で寝てるのよお！ 起きてよー灯夜兄い！ ねえっ  
たらあー！」

「んぐあ……。誰だ？ 俺の安息の刻を邪魔する輩は……。！ もれな  
く執行猶予3秒付きの死刑15年の刑に処するぞ……。ぐう」

「うっ……。灯夜兄がいぢめる……。いいもん、音遠、泣いちゃう  
もん。うるうる……」

「……。あーうっせーなあ！ 起きればいいんだろ起きれば！ った  
く……。、何でも泣けば済むと思いやがって……。で、何だよいった  
い？ 俺を起こしてまでの用件つてのは。ええ？」

「起きてくれたなのー えっとね、灯夜兄にそっくりな男の子を  
見つけたなの。多分、昨日灯夜兄が見つけた人だと思っただけど…  
…。間違えちゃったよ、あんまり似てるからさあ」



「え、お前も見つけたのか。何かそいつには引つかかるんだよなあ……。会った事ないはずなのに、昔から一緒にいた気がしてさ」  
「うん……。私もね、そう思ったの。何でだろうね？」

「この辺の奴つてのは間違いなさそうだな。今日、そいつ探してみ  
てさ、見つけたら聞いてみるか？」

「ホントにー？ いいの？ 勉強大丈夫なの？」

「お前が言うなお前が！ つーか、こんな気持ちじゃ集中して勉強  
できそうにねえからな。スッキリさせておきたいし」

「私も一緒に行く！ いいでしょ？」

「いいよ別に。お前も気になるんだろ？ それに、2人で手分けし  
て探した方が早く見つかるしな。お前が足引つ張らなきゃだけど」

「ホントー？ やったー！ 灯夜兄大好きだうー」

（やった、これであの人が見つかったら両手に花 楽しみだにや  
あ……）

「ちっ、こんだけかよ。つまんねーの。行こうぜ！」

駅周辺の繁華街の路地裏は、少し入ると別世界が広がる。

絶え間なく恐喝や傷害事件、薬物の売買などが起こっている。

ここを根城にする不良グループも多数存在し、彼……入沢灯輝も  
そういった人間の1人であった。

彼がその道に手を染めた理由は2年前に遡る。

高校に入学してから2ヶ月経ったある日、彼は校内で発生した暴  
力沙汰に巻き込まれた。

自分が仕掛けた暴力ではなかったが、その時の教師の言葉がよほ  
ど気に障ったのか、翌日には退学届を提出した。

それが原因となり、彼は町をたむろする不良軍団の1人となつて  
しまった。

彼は恐喝を得意としており、遊ぶ金は常にこれで調達していたよ  
うだ。

その為、何度と無く補導されては両親に迷惑をかけ続けていた。しかしある日のこと、ついにそれは起こった。

すでに数え切れないほどの補導回数になった時、灯輝の父親は交番内で激昂したのだ。

いつもは温厚な父親がこれほどまでに怒りを露わにするのは珍しかった。いや、今までに無い事であった。

この言葉をきっかけとして、彼は今では少し大人しくなった。

定時制ではあるが学校にも通い始め、昔からの夢への道を少しずつ、確実に歩み始めているのであった……。

時は午後4時。

灯夜と音遠の兄妹は、灯夜にそっくりな男を見つける為に学校近くを搜索していた。

「ここで二手に分かれるか……。お前はそっちだ。俺はこっちを探す。見つけたらワン切りしろよ！」

「うん、わかった！ 絶対、ぜーったい見つかるんだから！」

「30分後、またここに帰って来い。見つけたら連れてくるんだからな。分かったな？」

「はい てへへ……」

2人は手分けして探す事にしたようだ。

その頃、自分が搜索対象となっている事には全く気付いていない灯輝は、やはりこの近辺を歩いていた。

定時制の始業時間にはまだ時間があるので、それまで時間をつぶしに来ているのだろう。と、その時であった。

「あ……あいつは……？ 俺にそっくりだ……」

灯輝は、自分にそっくりな男……灯夜を見つけた。しかし、当然面識はない。

そのはずであったが、何とも言えない懐かしさがこみ上げてくるような感覚に襲われた。

灯輝は、意を決してその男……灯夜の元へと近づいてこう切り出した。

「おいアンタ！ ちょっと待ってくれ！」

自分に声をかけられたと思った灯夜はたまらずその声のする方へと顔を向けた。

すると、いつか見た自分とそっくりな男がそこにいた。

「お……お前は……」

「それはこっちのセリフだ！ お前は何だ一体！？」

「何だ！？ って言われても知らねえよ！ 俺は俺だ！ しかし……」

……本当にそっくりじゃねえか……。他人とは思えねえ……」

「何でだ……？ 俺には兄弟なんて居ないはずなのに……」

「あつ、兄弟！？ いっけねえ、音遠に知らせねえと……。ちょっと悪い。電話させてくれ」

「お、おお……」

言づが早い、灯夜は音遠の携帯電話を一度だけコールした。

「もう一つ悪い。ちょっと俺についてきてくれないか？ 時間は取らせない。いいだろ？」

「あ、ああ……。いいよ別に。まだ学校までは時間あるし」

半ば引つ張るように、灯夜は灯輝を待ち合わせ場所まで連れて行った。そこにはすでに音遠が待っていた。

「あつ……今日の朝、灯夜兄と間違えた人だ……」

「アンタは……今朝、駅で俺を逆ナンした娘だな？」

「何い！？ それは本当か？ いくら俺が好きだからって同じ顔の奴を逆ナンするなよな、お前」

「してないもん！ ただ間違えて声かけちゃっただけだもん！」

「ハハハ……。面白い娘だなあ。それで？ アンタらは何なんだ？

そろそろ教えてくれねえかな？」

「お、悪い悪い。俺らは双子の兄妹なんだけど、2人揃ってお前を見かけたときから他人じゃないように感じてな……」

「うんうん！ だから私も思わず間違っつて声かけちゃったんだもん！」

「それで探してたつて訳だけど、まさかお前の方から声かけてくるとは思わなかったよ」

「それなら俺もそう思った……。アンタを一目見たときから、こいつは何か俺と関係あるつて思ったわけよ」

「でもさ、でもさ、ホントに2人とも似てるよねえ？ カッコイイから2人とも好きだよ はぐ」

音遠は大好きな顔が2つもある事に感動し、勢いよく2人に抱きついた。

「ぐぼはうあ！？ 何だいきなり！？ アンタの妹つてのはいつもこうなのか？ あー痛え……」

「これがそうなんだよ……。困ったもんだ。双子のクセに全然性格違うんだから、参っちゃうよ。この困ったちゃんめ！ ぐりぐり」

「あぐう……。灯夜兄がまたいぢめる……。うるうる」

「おまけにすぐ泣くしよ……。マジでどうにかしてくれつて感じだよ。なあ？」

「俺にはどうにもできねえつて。それよりも……。これはやっぱ詳しく調べる必要があるそうだな」

「お互いに『何かある』つて思ったんだからな。オカルト的な何か働いたとしか思えねえ」

「俺は超常現象的な事は信じない方だったけど……。これは調べてみたい。親なら何か知ってるかもな」

「やっぱそうなるか……。そうになると、とんでもない事実が明らかになっちゃうたりして……。覚悟が必要だな」

「どんな結果であろうと、それを受け止める覚悟を……。な。お前は大丈夫か？」

「俺は大丈夫だ。先に聞いたとなると、お前も大丈夫そうだな。問題は……。アイツか」

「あの娘は大丈夫なのか？ 何かこの話にもついて行けてねえみたいぞ？」

「その辺は俺が何とかするから心配すんな。あ、ケータイ番号教えて。あとメルアドも。連絡できた方が都合いいし」

「ん、そうか、分かった。どんな結果だろうと、それを素直に受け止めような……。あ、悪い。そろそろ学校だ」

「この時間からってーと、定時制か……。大変だな。頑張れよな」  
「ああ、またな」

灯輝はひとり、その場をあとにした。

「行っちゃったね、あの人」

「ああ……。今度会うときはどんな関係になってるんだろうか……？ 今回は他人だったが、次は……」

「水嶋灯夜……。水嶋音遠……。そして俺、入沢灯輝……。顔も似てるし、名前も……。まさか、俺はあの2人の……？」

灯輝と別れた2人は、この件を確かめるために家へと急いだ。

現状でわかつている事は、灯夜と灯輝があまりにも似ている事、お互いに一目見た時から何とも言えぬ懐かしさを感じた事。

これだけでも、ひとつの仮説を導くには充分事足りていた。それは『灯夜と灯輝は実の兄弟』だということだ。

当然この時点では仮説に過ぎないが、この説が正しい事と知るのには、そう時間はかからなかった。

家に着いた灯夜は早速母親に聞こうとした……が、夕食の準備をしていたため声をかけられなかった。

(まあ、夕食の時にでも聞いてみるか。焦っても仕方ないし……) 灯夜はひとりそう思い、自分の部屋へ戻ろうとした……その時で

あつた。

「お母さん！ 私達にはもうひとり兄弟がいるんでしょ!？」

台所に響く音遠の声。彼の思いとは裏腹に、音遠が聞き出してしまったのだ。

「あのバカ！ よりによつて今聞き出す事はねえだろ！ くそ、念を押しておくべきだった……俺のミスだ」

「音遠……？ どうしてそれを……？」

突然の音遠の言葉に狼狽する母親。しかし音遠はお構い無しに続けた。

「隠さなくてもいいよ。私たち知っちゃったんだ。灯夜兄にそっくりな、私たちの兄弟がいるって事をね……」

「もうやめる音遠！ 母さんゴメン。このバカが変な事言っちゃまって……」

「いいのよ、灯夜。言わなかったお母さんが悪いの。いつか言わなくちゃって思ってた事だし……」

そう言う母は、調理の手を止めて奥の部屋へと行ってしまった。

1分後戻ってきた母の手には、一枚の写真が握られていた。

「これは……母さんと父さんか？ それと……この赤ん坊たちは俺らか。ん？ この人達は？」

「その人達が、あなた達のもう1人の兄弟……灯輝をもらっていった入沢さん一家なの」

「もらっていった……？ って事は、灯輝は本当に俺らの兄弟だったのか!？ じゃあ、何であいつはもらわれて行ったんだ!？」

「やっぱり……。でもどうしてあげちゃったりしたの？ 人間はモノじゃないよう……。えぐつ、簡単にあげるとかもらうとか言っちゃヤダう……。灯輝くんがかわいそうだう……」

「泣くんじゃねえよ！ 大人の事情つてのがあつたんだろうがよ。俺らガキには介入できねえ事情が……」

「でも……でも……イヤだう……」

「……確かに、音遠の言う通り人間はモノじゃないから、簡単にあげるとかは出来ない。でも、私達はあの子を捨てたわけじゃないの。合意の上で決まった事。灯輝を里子に出す事は」

ここで母は、自分が三つ子を生んだ直後入沢家の母親に起こった事件を告白した。

母体は助かったが、赤ん坊は手遅れであつた事を。

「そんな事があつたのか……。じゃあ、灯輝は本当の兄弟で、俺らは三つ子だつたつて事で間違いないんだな？」

「そうよ。灯夜、あんたが一番先に生まれたから長男。その次に音遠で、最後に出てきたのが灯輝なの」

「灯輝くんは私の弟……？　じゃあ、私はお姉ちゃん？」

「そういう事になるわね。そんな大袈裟な事じゃないけどね」

「わーいわーい　お姉ちゃんだあ　今度灯輝くんに会ったら私

の事お姉ちゃんって言わせよつと　楽しみだにゃあ……」

「アホか。ん？　となると、あいつは本当の親じゃない人に育てられたんだ……。俺らなんかよりよっぽどシヨックでかいだろうな……」

……  
真相を知つた灯夜は、思いついたように立ち上がる。

「そうだ。灯輝にメールしとくか。定時制じゃまだ授業中だろうから電話じゃマズイだろうし……」

同日午後8時。灯輝の通う定時制学級の授業が終わる時間である。荷物をまとめて帰ろうとしていたその時、マナーモードにした自分の携帯が震え出した。

「メールか……誰だ？」

送り主は灯夜。文面は、先ほど発覚した灯夜たちの出生の秘密であつた。

同時に灯輝は、自分の親が実の親ではない事を知ってしまった。大急ぎで帰路につく灯輝。内心はシヨックのはずである。

しかし、それを必死に押し殺している。

(俺はあいつらの弟……。そして俺は本当の子供ではない……。覚悟はしていたが、やはりつらいものがあるな……)

午後の9時をまわった頃、灯輝は自宅に戻っていた。

灯夜から知らされた、自分の出生の秘密を親に聞く。その思いが彼を動かしていた。

もう他には何も見えていないであろう。ただ彼は、自分の過去が知りたかったのだ。

「ただいま……。なあ、俺はアンタらの本当の子供じゃねえんだろ？」

最初に出たのはこの言葉。いきなりの喧嘩腰は、動揺が隠せなかった証拠だ。

無理もない。今まで育ててくれた人たちが、実は本当の親ではなかったなどと聞かされては。

「灯輝……どうしてそれを……？」

それを聞いた灯輝の母親は、水嶋家と全く同じ反応をした。

「水嶋灯夜。そして水嶋音遠。こいつらは俺の兄弟なんだろ？ 今日全部わかっちゃまったんだよ。あつちはもうぶっちゃけちゃまったみてえだからな。こつちもぶっちゃけてくれよ。な？」

「でもね、灯輝……」

「この期に及んでそれはなしだぜ。大丈夫だよ、おふくる。俺は怒ったりしねえからさ、正直にありのままを教えてくれよ」

「……わかったわ。いつかは話さないといけない事だったからね……」

ここで母は、自分の身に起こった事件を告白した。

母体は助かったが、赤ん坊は手遅れであった事を。

そして、その後持ちかけられた、里子の申し出。この結果を見かねた水嶋家が自分達の子供を1人、入沢家へと里子へ出した。



その赤ん坊が、今の入沢灯輝である。

しかし、『灯輝』という名前は入沢家がつけたものではなく、水嶋家がすでに決めていた名前だったようだ。

事の顛末をあらかた聞き終えた灯輝は、半ば爽快感に包まれていた。

この日だけで、自分には兄と姉がいた事、そして、自分の親は生みの親ではなく、育ての親であった事を知ったのだ。

しかし、荒んでいた数年前の自分を救ってくれた父親、いつでも自分を信じてくれていた母親を、今になってどうして親だと思わぬ事ができようか。

むしろ両親は、灯輝が本当の子供でないために、なおのこと親らしいことをしてきたのではなからうか。

そう考えると、自然と目頭が熱くなってきた。気付かないうちに、灯輝の目には大粒の涙が溜まっていた。

「チクシヨウ……なんで涙なんか出て来やがるんだよ……。らしくねえよチクシヨウ……」

「今まで黙っててごめんなさいね……。灯輝。でもね、これだけはわかって欲しいの。私達は、今まであなたを本当の子供として育ててきた」

「もついいんだよ、おふくろ。これからはそんな事は気にしねえよ。バラされたって構わないし……。それに……。さ、俺にも兄弟ってのがいたってのは嬉しいしな……」

灯輝は虚空を見ながら、呟くように言った。

「それにさ……。人のよさそうな兄貴に、ガキっばいけどめっさかわいい姉貴がいるなんて、自慢できるじゃんか、な？」

「灯輝……。優しい子に育ったのね……。お母さん嬉しいわ」

「ケツ、よしてくれよ。優しい不良なんてガラじゃねえよ。へへ……」

こうして、3人の長かった夜は過ぎて行った。また明日から元の生活に戻るのだ。

灯夜と音遠は仲良く学校に、灯輝は昼間はバイトに精を出し、夜には定時制に通うという生活に。

しかし、そんな生活にも微妙な変化が起こった。それは、水嶋家と入沢家が再び交流を始めたこと。

それこそ家族ぐるみの付き合いになったのだ。全てが元の鞘に戻った。

「ふう……。灯輝くん、今何してるのかなあ……。？ また会えるかなあ？ ねえ灯夜兄？」

「別にそこまで思いつめる必要ないだろ？ 何たってあいつは、俺らの弟なんだからな！」

月日は流れ……。ここは牧田海浜大学、通称牧浜大学文学部の合格発表会場。

灯夜と音遠の兄妹は、揃ってここを受験していた。

事前に受けていたセンター試験において、灯夜はB判定をもらっていたが、音遠は合格ラインぎりぎりのD判定でしかなかった。

それだけに音遠にはまたも辛い受験となったが、その結果が今発表されるのだ。

「あうう……。私の番号あるかなあ……。なかつたら灯夜兄とおんなじ学校行けないよう……。？」

「そんな気い張るなよ。俺だって確実に合格してるとは限らないんだし……。な？」

「灯夜兄……。今日は優しいね。好きだう はぐ」

「ぐぼつほうあああ！ こんな人が密集してる所でくつつくな！」

「いいじゃーん。大好きなんだもーん、もーん！！」

「それに、今日はって何だ今日はって！？ 俺はいつだって優しい

お兄ちゃんだろうが!? 違うか? チガイマスカー? キイテマ  
スカー??」

「あぐう……灯夜兄のいぢわるう……。うるうる」

「……お、発表だな。俺が代表して見に行つてやるから受験票よこ  
せ」

「あ、はい 頑張つてねー!」

灯夜はひとり、人ごみの中へ消えていった。

15分後、人ごみの中から灯夜が現れた。

その表情はどつちともつかなかった為、表情から合否を判断する  
事は出来なかった。

「あ、戻ってきた ねーねー! どうだったのー? 早く教えて  
教えてー!」

「そんな慌てんなよ。焦つたつて結果は変わらねんだからよ……」  
そういうと灯夜は、何故か視線を逸らした。その微妙な変化を音  
遠は目ざとく察知しこつ尋ねた。

「えっ……? どうしたの? まさか、落ちちゃつたの?」

「違えよバーカ。2人とも合格してたよ……」

「ホントにー!? ホントに2人とも合格してたの? でも何でそ  
んなつかない顔してるの? ねー何でえ?」

「嘘ついてどうすんだよ。合格してたのは嬉しいよ、そりゃ。でも  
な……またお前と同じ学校つて事実だけで……はああ……。他のと  
ころ受けなおそうかな……」

「はうう……何でそんなこと言うの……? いぢめちゃヤダよう……  
……。私の事がキライなのう……?」

「だああ! こんな所で泣くな! 誤解されるだろーがっ! わか  
つた! 俺が悪かつたよ! ホント悪かつた! お詫びに今日の昼  
飯は俺が奢つてやる! な? それでいいだろ!」

「何でもいいの……? Hexagramの『ジャンボトリュフパ  
フェ』もいい……?」

「あーいーですよ、ええ何でもいいですよ！ ちくしょーめ……」  
「ホントー？ 約束だからね！ ちゃんと守ってね」  
「へいへい……。あーまたしばらく禁ゲーセン生活になるな……」

2人は牧浜大学をあとにし、家路についた。

順調に行けばこれから4年間、また一緒に登校するのだ。

手間のかかる妹だが、最近の灯夜は、何故かそんな音遠が以前ほど嫌ではなくなっていた。

むしろ、慕われている事を喜んでもいるように感じていたのだ。

「灯夜兄どうしたの？ 私の事じーつと見ちゃって……」

「あ、いや、べ、別に……。ただな……。お前がちよつと最近な……」

…、か、かわいくなっただんじゃねえかって思っ……」

「きやう〜！ 灯夜兄にカワイイって言われちゃった〜 ありがとう」

とー！ 大大だーい好きだうー きやう」

「ぐぼはうあ〜〜〜〜〜！」

## 過去話1：灯夜の一番長い日

それは夏休みのある日のことだった。

この日の灯夜は気分が高揚していた。無理もない、初めて出来た彼女に会いに行くのだから。

実は灯夜には、18年間生きてきてまだ異性と付き合った事がなかったのだ。

異性といっても妹の音遠がいつもくっついていくくらいだが。

そんな灯夜にもついに恋人と呼べる存在が出来たのだ。

しかしながら問題が一つあった。それは……その恋人と呼べる存在が、遠くの地に住んでいることだ。

そんな二人がどのようにして出会ったかというのは、ネット上のやり取りからであった。

高校3年に進学すると同時に、親から家族で使う名目でパソコンを買い与えられていた灯夜。

しかし実質、灯夜しか使う者がおらず、それは今でも続いている。

彼らの住む場所からは、夜行バスを使う場合は8時間ほどかかってしまうほど遠い。

当然、この旅について音遠が指摘しないはずがない。なので、今もしつこく聞いている途中なのである。

「ねーねー灯夜兄！ 私も行きたーい！ 連れてってー！！」

「アホか。お前が行ってどうすんだよ。いいか？ 俺が彼女に会いに行くんだぞ？ 妹同伴なんてアホくさいこと出来るか！」

「えぐう……。灯夜兄がアホって言った……。はうう」

「ま、お前は留守番だ。俺の土産話でも期待して待つてろよ！ そんなじゃ、夜行バス乗らなきゃだからもう行くわ。じゃーな！」

こうして、灯夜は意気揚々と出かけて行った。しかし、この時の灯夜には、自分の身に起こる事を知らなかったのだ……。

「うにゆう……。灯夜兄まだかなあ……。いないと寂しいよう……。電話くらいしてくれてもいいのになあ……。」

一人置いていかれた音遠は、灯夜の事を心配していた。

時間は朝の8時。まだ夏休みなので早く起きる必要などないのだが、兄が心配なため目が覚めてしまったようだ。

兄である灯夜の事が大好きな音遠は、顔すら見た事もない女性に灯夜を取られてしまうのではないかという不安でいっぱいだったのだ。

しかし、その時であった。

ピンポン。

「あつ、はい！ 誰だろ、こんな朝早くに」

自宅のインターホンが鳴り響いたので、音遠はドアを開けに行った。

するとそこには……。出かけていたはずの灯夜が立っていた。

「音遠か……。ただいま。皆はまだ寝てるのか？」

「あつ、灯夜兄おかえりー！ 早かつたね？ ねえねえ、どうだったのお？ 灯夜兄の想い人は。きやは」

「っせえな……。てめえには関係ねえだろ。疲れてんだよ、休ませるやどあほづが」

「灯夜兄……。どうしたの？ 怖いよ……。何かあったの？」

「だから関係ねえって言うてるだろ！ いいからどけ！」

そう言う灯夜は、怒りのままに音遠を突き飛ばして自分の部屋に戻ってしまった。

普段は温厚、と言うか感情を表に出さない灯夜がこれほどまでに怒りに打ち震えているのは、常に一緒にいた音遠でさえも見た事がなかった。

音遠は、未だに何が起こったのか把握しきれていなかったが、自

分に来れる事は灯夜を慰める事だと思い、無心で灯夜の部屋へと向かった。

「灯夜兄……、入る……って、うわぁ……」

灯夜の部屋に入るなり絶句してしまった音遠。

無理もない、部屋中の物が散乱していたのだから。

彼が、いかにやり場のない怒りを物にぶつけていたかがわかる。

しかし、当の灯夜は幾分落ち着きを取り戻したように感じられた。音遠は意を決して、灯夜に尋ねてみた。

「ねえ灯夜兄……？ 一体どうしちゃったの……？」

「音遠か……。さっきはごめんな、突き飛ばしたりして。俺どうかしてたんだ……」

「ううん、それはもういいの。でも……、せめて何があったかくらいは教えてくれない？」

「ああ、わかった。隠し通せるような事じゃねえから……。洗いざらい話すよ。あんな……」

その後、灯夜は向こうで起こった事を全てさらけ出した。

出会ったはいいが、デート経験のない灯夜は何をして良いのか分からず、結局はその彼女を満足させる事が出来ないまま終わってしまったのだ。

そんな自分に苛立ち、物に当り散らしてしまったようだ。

「これでいいだろ……？ わかったらさっさと出てけ。俺は寝たいんだ。夜行バスってのは寝にくかったし」

「やだ……」

「は？ 何だって？ やだって言ったか今。何ふざけた事ほざいてんだよてめえ。いいから出てけっての！」

「ふざけてなんかないもん！ 私はそんなウジウジした灯夜兄がヤダって言ってるんだよ！」

「てめえなんか何がわかるってんだよ！ 初めてできた彼女を傷

つけちまった俺のつらさがわかるのか!? 一生この事実を背負っていかなきゃならねえこのつらさを!」

「わかるもん! 私はいつも灯夜兄と一緒にいるからわかるんだもん! 私たち双子なんだよ? わかるよそのくらい!」

強気にそう言い放った音遠ではあったが、その目には大粒の涙が溜まっていた。今にも溢れ出しそうな勢いである。

「お願いだから一人で抱え込まないでよ……。私だって役に立てるんだから……」

「じゃあ、今すぐ俺のこの痛みを何とかしてくれよ! 口では何とも言えるけどなあ、実際にはできねえだろ? 所詮てめえはいつでも口だけなんだよ」

「……」

灯夜の言葉を受けた音遠は、無言のまま立ち上がり、灯夜のほうに向き直った。そして……。

ふわっ。

音遠は、無言のままに灯夜を抱きしめていた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「灯夜兄……。少しだけ目を閉じててくれる? すぐ終わるから……」

言われるがままに灯夜は目を閉じた。音遠は、灯夜の目が完全に閉まった事を確認すると、そっと灯夜の唇に口づけをした。

(ん……。ね、音遠……。何を……)

灯夜は、口がふさがっていた為に声は出せなかったが、何をされているかは把握したようだ。

しかし、音遠はまだ灯夜の唇から離れようとはしない。

灯夜がそっと目を開けてみたところ、音遠もまた目を閉じていた。そして、大粒の涙が頬を伝っていた。

音遠なりに自分のつらさ、悲しさを癒してくれている事を、灯夜



は今初めて悟ったのだった。

「音遠……。ありがとう。もういいよ……」

「ん……。あ、いきなりゴメンね、あと……。ファーストキス、奪っちゃったね……。ごめんなさい……」

「気にしねえよそんな事。それよりもさ、俺の為にありがとうな……。だいぶ慰めになったよ……」

そう言っていると灯夜はおもむろに音遠を引き寄せて、そして彼女を優しく抱きしめた。

「灯夜兄……。？ あっ……」

灯夜は無言のまま、音遠の唇にそっと口づけをした。先程とは立場が逆転していたが、続いた時間は先程の比ではなかった。

（ありがとう音遠……。お前のおかげで立ち直れそうだ……）

（灯夜兄が私に……。はうっ、生きててよかった。最高に幸せだにゃあ……）

二度目の口づけが終わった時、お互いの涙はすっかり乾いていた。

## 過去話2：音遠・その愛

「灯夜兄〜？ もう起きないと遅刻しちゃうよ〜？ 今日はずいぶりの登校日だから早く起きて一緒に行こうよ〜！ ねえったらあ！」  
灯夜の部屋に響く音遠の声。そう、今日は夏休み中に一日だけ存在する登校日であった。

時間はすでに7時をまわっている。そろそろ準備に取り掛からないと間に合わないと思った母親は、音遠に灯夜を起こすように命じていたのだ。

しかし、低血圧で朝に弱い灯夜がすぐに起きるはずもないのだが……。

「ん……んが？ 闘魂がどうしたって？」

と、音遠に起こされてしびしびベッドから半身を起こした灯夜が言った。どうやらまだ意識は別のところにあるようだ。

「違うよ〜！ 登校日だよと・う・こ・う・び！ 忘れちゃったのお？ しょーがないなあ……」

「うつせ。俺が朝に弱い事くれー、ずっと一緒にいるお前なら周知の事実だろうが」

「そんな事いいからあ！ 早く起きて行こうよあ！」

「まあ待とうや。俺にも準備というものがあつてだな……」

「準備って？ 何な〜に？」

そう言うつと音遠は、灯夜のベッドに腰を下ろした。その勢いで二つにまとめた髪が揺れる。

音遠の髪から漂うほのかな香りが、灯夜を包み込んだ。

「ねえねえ見て見て〜。今日の私の髪型どう？ かわいい？」

「いつもと同じだろうがよ。しかし、よく飽きもせずそんなガキっぽい髪型続けられるよなあ」

「そんな事無いよ〜。触って確かめてみてよ」

言い終わると同時に灯夜の手を掴み、自分の頭上に触れさせる音

遠。そして、灯夜の手を左右に動かした。

「きやう　灯夜兄にいいこいいこしてもらってるにや　音遠、  
幸せだう」

「あ、あのなあ……。自分でやって空しくならないか？　てかさ、  
何でそんなに俺なんかがいいわけお前は？」

音遠に掴まれた手を離しながら、灯夜は再びベッドに横たわって  
しまった。音遠の意味不明な行動にすっかり呆れ果ててしまったよ  
うだ。

「大体よ、俺にくつつくようになったのっていつからだっけ？　結  
構前からのような気がするんだけど……」

横になりながら灯夜は、見上げるように音遠に尋ねた。音遠はい  
つの間にか、灯夜のベッドの空いているスペース……灯夜のすぐ隣  
に腰掛けていた。

「知りたいのー？　いいよ、教えちゃうね　あのね……」

時は数年前、中学3年次の修学旅行にさかのぼる。灯夜と音遠は、  
この日を心待ちにしていた。

3泊4日という長期間の旅行は、2人にとって初めての経験であ  
った。新しいクラスの仲間との親交を深めるいい機会でもあるう。

その日の初日のスケジュールを消化し、初日に宿泊するホテルへ  
と到着した一行は各々、割り当てられた部屋へと移動していった。

灯夜の部屋には、気の置けない仲間4人が一緒であった。

音遠はというと、やはりこちらも仲良し5人組が一つの部屋に集  
まっていた。

この後のスケジュールは、入浴後夕食という流れである。もちろ  
ん入浴はクラス順に行く。

ちなみに、灯夜はC組で音遠はB組であった。

入浴の時間までまだ時間があったので、灯夜は同部屋の友人とト

ランプゲームをする事になった。

「なあ、何やる？ 七並べとかはつまんねーからやめようぜ」

「そうだなあ……。じゃあ大貧民なんかどう？ もちろん掛け金はナシで」

「つたりめーだろ灯夜よお。オレ金なんか持つてないしよ」

「はは、悪い悪い。で、ルールは？ 8切りは当然として、7渡しとか10捨てとかJバツクとか縛りとか階段とか砂嵐とか都落ちとか大革命とかいろいろあるだろ」

「なんだよそれ、知らねーよ！ どこローカルだよ！？」

そんなやりとりをしながら大貧民が始まった。その最後の会話は何故か音遠の話になった。

「なあ灯夜。B組の水嶋さんってさ、お前のなんなのさ？」

「あん？ 何って何がだよ？」

「水嶋って名字なんて今まで聞いたことなかったんだけど、この学年で突然2人もいるもんだから気になっちゃってさ」

「お前の価値観だけで計るな……。まあいいや。そいつは俺の双子の妹だよ。全然、これっぽっちも似てねえけどさ」

「マジかよ！ お前の妹！？ しかも双子だって！？ くっうう！

あんなかわいい娘と双子だなんて羨ましすぎる！」

「灯夜のアニキ！ これからはあんたの事を『アニキ』と呼ばせてください！」

音遠が灯夜の妹だと知るやいなや、矢継ぎ早に灯夜に質問する友人たち。灯夜は慌ててそんな友人たちを制する。

「ちょ、ちよつと待ちやがれお前ら！」

しかし、友人たちは止まらない。もうトランプの存在などどうの昔に忘れてしまったようだ。

「水嶋さんはお前の事なんて呼んでるんだ！？ 『お兄ちゃん』と

か『おにいたん』とかなのか！？」

「兄弟の禁断の恋！ なんてヤっちゃってないだろうな！？ ええ！？」

「やっぱり寝る部屋は一緒なのか？　もしかして風呂も一緒に入っちゃってたりしちゃうとか!？」

「学校来る時も二人で仲良く手をつないだりしてるんだろ？　まさか！　腕を絡ませたりしてないだろうな!？」

「……どうなんだあ!？」

「どうやらこの連中は音遠のフアンのようだ。中学生にしてはやけに質問事項が過激な内容であることから、お盛んだという事がわかる。

「落ち着きやがれお前ら！　おいコラ!」

その時、部屋の扉を開く乾いた音が聞こえてきた。その音で興奮していた連中も我に返るのだった。

「B組風呂終わったよ。次お前らな」

「おお、わざわざサンキュ。じゃお前ら行くぞ!」

「オツケー。でもな灯夜。さっきの答えは風呂で聞かせてもらおうかな!」

「へいへい……。いいから行くぞ」

「あゝ、いいお湯だったねえ!」

そんな声が響く。音遠らB組の女子が入浴を終えて自室に戻っている途中である。

「音遠ちゃん、早く早く!」

「わかったー。ちょっと待っててえー」

髪形を整えて脱衣所から出て行く音遠。しかしそこに待っていたのは音遠の友人ではなく、見知らぬ男子数名であった。

「えっと……、どちらさまですかあ?」

「水嶋さん、だよね?」

「う、うん……。えっと……、誰?」

「ま、いいーからいいーから。ちょっと俺らに付き合っつてよ。どうせ夕飯までヒマなんでしょ?」

「あ……」

その数名の男子は音遠を取り囲むように行ってしまった。

あまりにも突然の出来事だったため、誰も何も出来なかった。

「ちよつとどうしよう……。音遠ちゃん連れて行かれちゃったよ……？」

「先生呼んだほうがいいかなあ……」

「あ、水嶋くん呼んだ方が早いんじゃない？ 音遠ちゃんのお兄さんを」

「そうだけど……、どこにいるかわかんないよ……」

「待ってれば来ると思うよ？ 水嶋くん組だから」

「でもやっぱり不安だよ……。私先生呼んでくる！」

「あ、私も！」

音遠の友人2人は、この事態を重く見て教師を呼びに行った。

その時彼女らは、灯夜たちとニアミスした事に気付いていなかった。

「あーあ……。これで大ごとになっちゃうなあ……」

と、友人の一人が漏らしたとほぼ同時に、先程音遠を連れて行った連中の一人がやってきた。

「あのさ、みんなはさつき水嶋さんを待ってた子たちでいいんだよね？」

「そうだけど……それが？」

「お兄ちゃんは来たかな？ あの憎き灯夜は……」

「え……？ 憎きつて、どういうことなの？」

「ホントは俺らだつてこんな事したくなかったんだけどさ……。アイツに一泡吹かせる為にはこうしかなかったんだよね……」

「話の内容が見えないよ……。だからどういうことなの？」

「灯夜は……。俺らにとっては邪魔なだけなんだ！」

そういうとこの男子生徒は、何故これほどまでに灯夜を憎むかを赤裸々に告白した。

勉強もある程度でき、スポーツもそつなくこなし、ルックスの面でもかなりの物を誇り、誰にでも分け隔てなく接する灯夜は、自然

とクラスの人気者になっていた。

そんな人間の存在が、この男子生徒たちにはたまらなく嫌だといふのだ。

「ま、そういうわけだ」

「そういうわけって……。だからって音遠ちゃんを連れて行く理由にはならないでしょうよ！ 水嶋くんを憎む理由にも！」

「そ、それはだなあ……。って、やべえ！ 灯夜が来やがった！

このメモをヤツに渡しておいてくれ！ んじゃな！」

そういうのが早いが、メモ用紙を残して男子生徒はその場から立ち去ってしまった。

「あ、ちよつと！ ……まったく」

それからすぐに灯夜たちも大浴場に着いた。そこで今さっき起こった事件のあらましが灯夜にも伝わった。

「何だって……。？ 音遠が連れて行かれた？ 誰に！」

「このメモを渡しとけだって……。はい」

灯夜はそのメモを受け取り目を通した。そこにはこう書かれていた。

『お前の妹は預かった。返して欲しければお前一人で階段の踊り場まで来い。早くしないとかわいい妹がどうなっちゃっても知らないぞ！ ざまあみるバカ灯夜！』

「……ははは。呆れてくるぜ。アホらし」

「お前っ！？ どういうことだよ！？ 助けに行かないのかよ！」

「そういう意味じゃねえよ！ やる事がアホらしいってんだよ。助けには行くよ。一人で行かなきゃダメっばいから俺一人で行くけど」

「よ」

「無茶だよ！ 3人くらいいたよ？ そうしたら水嶋くんが大変な事になっちゃうよお！」

「関係ねえよ……。俺のせいで他人が迷惑被ってるんだぞ。俺が解決しなきゃならねえだろうが……」

「と、灯夜……」

普段は感情を表に出さない灯夜らしく、表情などに変化は見られない。

しかし、心の中でははらわたが煮えくり返っている事だろう。

灯夜はひとり、音遠の待つ階段へと向かって行った。

「はあ……はあ……。ただいま……」

「おお、ご苦労さん。メモは置いてきたな？」

「おうよ……。灯夜に見つかりそうになったから慌てて戻ってきたよ……。あー疲れた」

「灯夜兄？ ここに来るの？」

「へえ、アイツ灯夜兄なんて呼ばれてるんだ。いい身分なもんだ。

こんなかわいい娘にそう呼んでもらえるなんてなあ……」

「まったくだ。あんなヤツにはもつたいない！」

「ゴメンなあ水嶋さん。俺らもホントはこんな事したくなかったんだけど、あいつに仕返すにはこれしかなかったんだよ」

「奴が来たら自由にしてあげるから、それまでもうちよつと待っててもらえるかな？」

「でも、何でそんなに灯夜兄の事がキライなの？ 灯夜兄に何かされたのお？」

「別にそういうわけじゃ……」

その時であった。足音が大きくなり、ついに灯夜は現れた。

「おい、てめえら……。今すぐ音遠を自由にしやがれ。今すぐだ！」

「灯夜兄！ 来てくれたんだね……」

「来たな灯夜。約束通り一人で来たようだな。それでこそ俺らの宿



敵に相應しい」

「そんなことはどうでもいい！ 早く音遠を自由にしゃがれってんだ！」

「おうよ。ほらよー！」

男子生徒は、音遠を掴んでいた腕を離し、ぶつきらぼつに灯夜の方へ突き飛ばした。

「音遠……。遅くなってすまなかった。何もされなかったな？」

「うん……。でも、怖かったなの……」

「わかった……。お前はもう戻れ。俺はこいつらと話がある」

そう言つと灯夜は立ち上がり、男子生徒へと向き直つた。その表情にははつきりと怒りの顔が浮かんでいる。

「お前らどういうつもりだ？ 何でこんな卑怯な真似したんだ？

返答次第じゃただじゃおかないぞ！」

「どうもこうも……。お前が憎かつた。ただそれだけだ。それ以上の理由がどこにある！？」

「ふざけるな！ 俺はお前らなんか憎まれるような事した覚えはねえよ！ お前らが勝手に俺を憎んでるだけじゃないか！」

「ふざけてなんかねえよ！ そんな風に人を見下すような話し方が一番うぜえんだよ！」

と言つと同時に、男子生徒は灯夜の頬を殴りつけた。たまらず灯夜はよろめいてしまった。

「灯夜兄！」

「まだいたのか音遠……。この通り、どうやらこいつらは話し合いじゃ納得しないらしい。早いところ逃げないとお前も巻き添え食らうぞ。わかつたらさっさと行け」

「で、でも……」

「早く！」

「わかつたよお……」

音遠は涙を浮かべながら、一目散にその場を去つた。

「いい判断だな。殴られたつてのによくそこまで冷静になれるもん

だ

「うるせえな……。これでお前らはただじゃ済まないぞ」

「それはお前だって同じだろ？ もう共犯だよ」

「そうかよ……。一蓮托生ってやつか。そんじゃこっちも暴れさせてもらうかな……。どうせ怒られんならやるだけやった方がマシだしな」

「面白え。3人に勝てると思ってるのか？」

「けっ。3人はいないと行動も出来ないザコならいくら集まってもおんなじだ。少ない脳みそで考えやがれってんだチキン野郎共が」

その言葉を皮切りに、壮絶な殴り合いの喧嘩が始まってしまった。しかし、誰が見ても結果は明白であろう。さすがの灯夜も、3人が相手では分が悪い。

2人に羽交い絞めにされ、残りの一人に一方的に殴られるというパターンに持っていかれたので、灯夜はさながらサンドバック状態に陥ってしまった。

「てめえがいるから……！ てめえさえいなければ……！ オラア！」

灯夜への怒り、妬み、憎しみを込めたパンチが灯夜の腹部にクリンヒットした。

「ぐはあああっ！」

よほど威力が強かったのか、灯夜はついに血を吐いた。そして、力なく失神してしまった。

「おい見るよ。こいつ血い吐きやがったぜ。意外だな、てつきり血も涙も無いヤツだと思ってたよ。面白え。どれだけ出るか試してみようぜ！ うらあ！！」

今度は脇腹に強烈な蹴りをかました。その威力は、羽交い絞めにしていた2人も一緒に吹っ飛んでしまうほどであった。無防備な灯夜はひとたまりも無い。

「ちよ、ちつとは加減しろ！ 俺らのことも考えろや。階段から落

ちそうになつたじゃねえか！」

「悪い悪い。……ん？ そうだ、こいつ階段から落としてみるか？  
7段ほどしかねえから大丈夫だろ」

「オツケー。んじゃ俺にやらせてくれよ」

確かにその階段は7段ほどしかなかったが、今の灯夜は無防備の  
うえほとんど動けない状態であつた。

それを知つてか知らずか、男子生徒たちが灯夜を階段から落とそ  
うとしたその瞬間……。

「おいお前たち！ 何をしているんだ！」

階段に響く教師の声。音遠の友人2人が呼んだ教師が今来たのだ。  
灯夜の友人連中も一緒であつた。

「灯夜！ やべえんじゃねーの……？」

あまりにも変わり果ててしまった灯夜の身体。見るも無残な事に  
なつてしまつている。

「これは酷い……。早く保健の先生を呼んできなさい！ あと他の  
先生方も！」

教師の指示で動く灯夜の友人たち。教師自身は、灯夜に意識があ  
るかどうかを確認めた。

「水嶋！ 聞こえるか？ 水嶋！」

しかし、返答は無い。殴打を続けられた事で意識を失つてしまつ  
たようだ。

その場に残つていた灯夜の友人は、3人の方を睨みつけてこう言  
い放つた。

「お前ら……、自分で何したか分かつてんのか？ 大勢で一人をボ  
コにただけじゃねえぞ！ 見ろよ、目え開けないじゃんかよ……」

決して大袈裟な事ではない。灯夜は本当に気を失つている。

この言葉で、3人は自分達がしてしまった事の重大さに気付いた  
……と思つたが、全く悪びれる様子もなくこう返した。

「俺らは悪くねーよ！ そいつが恨まれるような真似するから悪い

んだ！ 俺らには関係ない！」

そう言つと同時に、3人はその場を立ち去つて行つた。

その時、灯夜の友人が教師達を引き連れて戻つてきた。音遠もそこにいた。

「先生！ みんな呼んできたよ！」

「おお、ご苦労……。だが、水嶋はまだ意識が戻らん！」

「ちよつとどいて下さい。私が診ますから……」

保健医はそう言いながら灯夜の元へ近づき、慣れた手つきで脈を確かめた。

「脈拍、異常なし……。意識は不鮮明……。命には別状なさそうだけど、このまま放置するのは危険ね……。近くの部屋まで運びましょうー！」

未だ意識の戻らない灯夜を支え、一行は近くの部屋へと移動した。

「色々と殴られたみたいね……。アザがそこらじゅうに出来てるわ。何も血を吐くまで殴らなくなつていいのに……」

保健医は色々つぶやきながら灯夜に応急処置を施している。吐血をしており、かなり危険な状態である事は間違いなさそうだ。

「先生……。灯夜は大丈夫なんですか！？」

「とりあえず今できる事はしたわ。後は大きな病院で手当してもらうのね……」

「この後どうしましょうか……。生徒たちにもこのまま黙っておくわけにはいかないでしょうし……」

灯夜の応急処置を終えた後、教師らはこの問題について話し合いを始めた。と、その時であった。

「う……。いたたた……。ここはどこだ……？」

何と、今まで意識のなかつた灯夜が突如として意識を取り戻した。当然、そこに居合わせた全員が驚いていた。

「灯夜兄！ よかつたうー！」

誰よりも早く反応したのは音遠であった。安心したのか、大声を

上げてしまっていた。

「灯夜！ お前、大丈夫なのか？」

「大丈夫って何が……って、何じゃこりゃ！？ 何でみんな集まっ  
てんだ？ 先生たちまでどうしたんですか？」

「水嶋……。お前って奴は……。自分に何が起こったか覚えてない  
のか？」

灯夜の予想外の反応に、半ば呆れながら尋ねた教師であった。当  
の灯夜は平然とした表情で言葉を紡いだ。

「あ……。音遠が誰かに連れてかれて、そんで俺が一人でそいつ  
らのところに行って、そいつらから音遠を取り返して……。あれ？

この後の事が思い出せない……」

殴られた衝撃のせいかどうかは定かではないが、どうやら灯夜は  
リンチに遭った事を覚えていないようだ。

「覚えてないって……。お前さっきまで失神してたんだぞ？」

「は？ 失神？ どういうことだよ……。って痛え！ なんで俺こん  
なに体中痛いんだろ」

言われて初めて気付いた様子の灯夜。不用意に脇腹に触れたせい  
で痛みを起こしたようだ。

「ちよつと水嶋くん！ さっきまで意識なかったんだからおとなし  
くしてなさいよ！ まったく……。あなたは怪我人なのよ？」

保健医は、自分がどうなったか全く分かっていない灯夜に現状を  
事細かに説明したことで、ようやく理解したようだ。

「ようやくと状況が理解できたぞ……。とにかく俺はこのまま病院  
行った方がいいんだな？」

「そういうことよ。本人が分かってなきゃしょうがないじゃない」  
保健医もすっかり灯夜には呆れてしまったようだ。

自然とこぼれた笑みに、殺伐としていたその場の空気が一気に和  
んだ。

「それじゃあ私が水嶋を病院に送り届けます。その間に、生徒たち  
をすぐホールに呼び寄せておいてください」

一人の教師がそう提案した。そこにいる全員がそれに同意した……はずであった。

しかし、それに異論を唱えたのは灯夜本人であった。

「ちよつと待つてくたさいよ。そこまでする必要ないよ」

「どうしてだ？」

「どうせその時、こんな事があつたから修学旅行は中止だー、なんて言つんでしょ？」

「そう言つしかないだろう。これは由々しき事態だ。中止にせざるをえない」

「俺一人が引き起こした問題に、学年全体を巻き込んで欲しくないんですよ。だからさ先生？ できればこの件は内密にはできないかなあ……」

灯夜はさらに続けた。

「俺は恨まれたからこうなつた。こうなつたのには少なからず俺にも問題があつたわけであつて、そのせいで先生とかみんなに余計な心配かけちまつた」

「お前、そりや違うよ。お前が気にすることはないつて、悪いのはあいつらなんだから」

「……その上、このあと他のみんなに知らせるとなると、今度は学年全体に迷惑がかかるだろ？」

「まあ、確かにそうなる。事態を知らない他の生徒たちには申し訳ないが……」

「俺一人のせいで、みんなにとつての中学校生活最大の思い出になるはずの修学旅行が無くなるのはたまんなく嫌だし……」

「灯夜……。お前そこまで……」

「もし中止にならなくとも、この事をみんなに知らせたら知らせてみんなが心から修学旅行を楽しめなくなるだろうよ。変にみんなに影を残しそつだしな」

灯夜は教師たちに向き直り、頭を下げた。

「だから！ この事はできれば内密にしておいて欲しいって訳です。

無理……ですか？」

灯夜の申し出しにしばし考え込む一人の教師。彼は悩んだあげくこり返した。

「うむ……。水嶋がそれでいいのならば、我々は君の意見を尊重したい。どうですかみなさん？」

「水嶋くん偉いわね……。そうそう言えないわよそんな事」

「もちろん構いませんよ。だが！水嶋はちゃんと病院行くんだぞ。そんな身体で旅行を続ける事は先生許さないよ」

「へい。やれやれ……。ま、仕方ないか。お前ら！俺の分まで楽しんでくれよ。あと、帰ったら課題見せてな」

「あつ、課題！そうだ。寺とか文化財見た感想とかスケッチの課題があつたんだ！思い出させやがってこんなにやる！」

「わつ、やめるバカ！怪我人に何すんだ！」

「きやはははははつ！灯夜兄おもしろい！」

こうして、灯夜のたつての希望により、この件については内密にされる事となった。

当然、灯夜にランチをした三人は灯夜の友人たちによって陰ながら制裁を受けることとなったのだ。

「そうそう……。そんな事あつたっけか。懐かしいなあ。それからだっけ？お前が俺にくつつくようになったのって」

音遠の話を聞いた灯夜は、納得したように何度も頷いていた。

「そうだよー。あの時の灯夜兄、すつごくカッコよかったんだからね！」

「あの時なあ……。じゃ今はそーでもないと。んん？」

「違つよあ〜！今もすつごくカッコいい」

そう言つと音遠は、灯夜に向き合つように身体を横たえた。距離にしてわずかに10cmと云つたところであろうか。

「お、おい音遠……」

「灯夜兄があの時来てくれなかったら、私どうなってたかわかんなかったんだからね？ すつごく怖かったんだからね……？」

そこまで言つて、音遠は灯夜の背中に腕を伸ばした。よく見るとその大きな瞳にはこぼれんばかりの涙が満ちていた。

「お願いだから、もう絶対私を放さないでね……。大好きなんだから……。離れたくないんだから……」

言葉とともに溢れ出す涙が頬を伝う。大粒の涙は布団を濡らしていた。

「そんなにまで俺のことを……。ほら、もう泣くなよ……。分かったから……。もう放さないから……。な？」

音遠の瞳から溢れ出す涙を拭いてやりながら灯夜もまた、音遠の背中に腕を回し、優しく、しかし強く抱きしめた。

さらに2人の距離は縮まる。

音遠はとめどなく流れる涙を抑えるように目を閉じた。と、その瞬間であつた。

……とくん。

音遠は不意に、自分の心臓の鼓動が大きくなるのを感じた。

かつて感じた事もなく、それでいて少しも嫌な感じのしない、むしろ高揚感に覆われる高らかな鼓動。

体温も高くなつていくのが感じられるようだ。

(やだ、どうしちゃったんだらう私……。多分顔真っ赤だよ……。もうダメ……。抑えられないよ……)

自分の異変に気付く音遠。

ほぼ無音な部屋の中において、自分の胸の鼓動のみが響いているような錯覚を受ける。

ともすれば灯夜にも聞こえてしまいそうなその鼓動は、さらに激しさを増す。

(今やらなきゃいけないことは……。これしかない！)



音遠は意を決して、着ていた制服のリボンをほどき、上着のボタンを外した。

そして、灯夜の上に覆いかぶさるような体勢になった。

「お、おい音遠……。お前何やってんだよ……。？ まさか……。？ や、やめろって」

灯夜が止めるのも聞かないまま、音遠は彼との身体の距離を限りなくゼロに近づけた。

灯夜には、彼女の胸の鼓動がダイレクトに伝わるような形となっていた。

「灯夜兄どう？ 私のドキドキ……。こんなになっちゃったんだよ……。？ 止まんないの……。苦しいの……」

「い、いや、そうじゃなくてだな……」

(あっ……。う……。も……。もう……。ダメ……)

……。どくん。

すでに昇りつめるところまで到達していた。

心音はさらに激しさを増す。

音遠は灯夜と密着したまま、顔を近づけた。

(う……。ん……。も……。う……。、いくしかない……。一歩先に進むためには……)

さらに顔を近づけ、ふたつの唇を重ねようと試みた。

その距離は、少しずつ、確実に近づいている。

そして今にもそれが重なり合おうとしたその瞬間……。

コンコンコン。

不意に聞こえた、部屋のドアをノックする音。

その音に2人とも我に返り、慌てて身体を離れた。

もっとも灯夜の方は、自分に何が起こったが未だに把握できずに

いたのだが。

「灯夜！ いつまで寝てるの！ 音遠も、ちゃんと起こさないとダメじゃないの！」

ノックの主は母親のようだ。灯夜を起こしに行った音遠がいつまでも戻らない事を気にかけて呼びに来たのだろう。

「早く起きなさいよ！ 遅刻しちやっても知らないからね！」

そう言い放ち、母親は部屋を離れていった。

「うっわやべえ！ 8時になりそうじゃんか！ あっちゃん、こりやあきらめて遅刻するしかねえな」

「ふにい……。あとちよつとだったのに……」

「あん？ 何があとちよつとなんだ？」

「あー、気にしないで！ てへへ……」

（この気持ちは嘘じゃない……。私はお兄ちゃんとしてじゃなく、ひとりの男の子として灯夜兄を見てるんだ……）

「灯夜兄……？」

「なんだよ？ 早く行かねーと遅刻すつぞ？ いや、これじゃどう

足掻いても遅刻なんだけどな」

「……大好き きゃう」

（好きになるのは自由だよ……。例え本当の兄妹だとしても……ね？）

### 過去話3：灯輝が不良になった理由

「よーよー。そのお兄ちゃんさあ、ちよーつと俺らに付き合ってもらえないかな？」

駅周辺の繁華街の路地裏では、今日も今日とて人間同士のいさかいが勃発していた

今も、駅への近道のためにここを通りかかった青年がここを根城にしている不良のひとりにつかまってしまっていた

「すみません。先を急いでますんで……」

「ちよつとでいいんだよ。時間はとらせない。あんだすたん？」

そう言う不良は半ば強引にその青年の腕を掴み、さらに奥の道へと消えていってしまった。

「灯輝！ また力毛連れてきたぜ！」

「おー、ご苦労さん」

一段高いところに座りながらその不良を激励する青年は……入沢

灯輝。

どうやら彼は、この不良グループをまとめているようだ。

「いるんだよなあ、近道だからってここを通って行っちゃおうおバカさん。ま、アンタもそのうちの一人ってこつた。わかるかい？ ……ん？」

灯輝は変に優しい口調でその青年に問いかけた。しかし彼は周りを取り囲む不良達に萎縮してしまい、何も返す事が出来なかった。

「黙ってちゃわかんねーだろうよ。な？」

そう言いながら灯輝は彼に詰め寄る……と同時に青年の胸倉を掴んだ。

「何か聞かれたらすぐに返事！ これはカタギの人間が仰る『常識』だとか『伝統』だとか言うことじゃねえのか？ 学校とか、親とかに教えてもらわなかったのか？ ええ！？」

「く、苦しい……」

「お前らはいつても、俺らみたいな人種を偏見の目で見るけどよお、俺らだって精一杯生きてるんだよ！ 自分の可能性を見つけるために！」

そのままの体制で、その青年の体を揺する。

「どうせ今もここ通りながら俺らのことそんな目で見ようとしてたんだろ！？ どうなんだ！？ ああ！？」

「お願いです……放して……」

「それとも何か？ そんな俺らを馬鹿にするためにわざわざここ通ったのか！？ もしそうだってんなら、とんでもねえいい度胸してんじゃねーかよ！」

何が気に入らないのか、灯輝は彼に罵声を浴びせ続ける。他の不良達もただごとではないといった面持ちで灯輝を見ていた。

「お、おう……。灯輝のヤツ、今日はどうしたってんだよ。やけに気合が入ってるってーか……」

「だよなあ……」

灯輝はさらに続けた。

「お前がどれほど偉いんだ……？ 俺らをそんな目で見られるほど偉いのかよ！ 学歴とか職業とか関係ねえぞ！」

吐き捨てるように言いながら、灯輝は彼を放り投げた。

「ケツ、こんな奴からなんかカツアゲする気も起きねえや。さっさと俺らの前から消えやがれ！」

そう言うつと灯輝は、近くにあつたゴミバケツを蹴り飛ばした。

大量に入っていたゴミが散乱する。そして、その青年は一目散に去っていった。

今日の灯輝は何かがおかしい。そう察知した仲間の不良は灯輝に尋ねてみた。

「なあ灯輝？ お前らしくもねえ……。いきなりキレちまうなんてよ。いつも真つ先にキレル俺らを止める立場のお前がどうしたんだ

？」

「おお、悪い……。さっきの奴の顔見たら、不意にあの日のことを思い出しまつてさ」

「あの日のことって？」

「あれ？ 話してなかったっけか。じゃあせつかくだし、話そうかね。あのな……」

話はこれより数ヶ月前の、灯輝の高校入学の時期にさかのぼる。

灯輝の合格した高校は、公立高校野球部としては初の全国大会出場を果たした高校であった。

そのためか倍率もかなり高くなっており、学校のランク自体も高い位置であるので、並大抵の事では入る事すら難しかったが、灯輝は推薦で合格を果たしてしまった。

中学時代の彼は素行もよく、生徒会に所属するほどであったため、推薦で合格する事ができたのだろう。

入学式後のクラス分けが終わり、自分の教室に向かう灯輝。

同じ中学からも何人が来てはいたものの、その誰もが同じクラスになる事はなかった為に、灯輝にとってはクラス全員が初対面になることとなった。

教室右端の最前列という自分の席に座り、教師がやってくるのを待つ灯輝。

そんな彼に声をかけてきた、一人の男子生徒。席は灯輝の二つ左隣。

彼は、灯輝の高校生活にとって初となる友人であった。名前を霧原新一郎と叫んだ。

「あ……あのさ……」

申し訳なさそうに灯輝に声をかける彼。細身の体に眼鏡といういでたちの、いかにもおとなしそうな少年であった。

「ん、何だ？ 何か用か？」

灯輝はいきなり声をかけられたため、こんな事しか返せなかった。「あつ……、うん……。まあ、そういうことなんだけど……」

相変わらず申し訳なさそうな態度を取る新一郎。灯輝はそんな彼を見かねてこう言った。

「そんなかしこまなくなっちゃっていいよ。な？　せつかく同じクラスで、しかも席がわりと近いんだからさ、友達になろうって事だろ。違うか？」

彼の性格を知ってか知らずか、灯輝は友好的にやりとりを返す。

「そうだよ！　よかった」。近くの人がキミみたいにいい人で。あ、僕の名前は霧原新一郎。よろしくね！」

そんな灯輝の態度に、ようやく安心したように自己紹介を行うのだった。

「俺は入沢灯輝だ。新一郎だな？　こつちこそよろしく！」

灯輝の方も自己紹介を返し、同時に右手を新一郎の前に差し出す。

「さ、握手しようぜ！」

「入沢くん……。キミってホントいい人だね……」

半ば感動したように灯輝の手を取る新一郎。こうして、2人の間には堅い握手が交わされたのだった。

「へえ」。お前もいっぱしに青春してたんじゃないかねえかよお。それが何でワルになったんだよ？」

「あの日の事ってコレか？　理由になつてねーじゃんよ」

「まあ待て。まだこの話には続きがある。あんまり思い出したくなかったんだけどさ……」

新一郎と仲良くなり、学校生活も充実してきた5月のある日の事。体育祭が近づいてきたため、灯輝たち新1年生は応援団の練習に駆り出される事となった。

この学校の体育祭応援団は1年生全員と2年生の希望者で構成されており、1年生は必ず参加しなければならなかった。

練習はほぼ毎日の放課後に行われ、練習内容もかなり厳しいものであった。

指導者の立場にある2年生は、大抵が部活に熱心に取り組むスポーツマンであったり、学校行事において中心的に行動する生徒なので、その指導にも熱が入る。

そのため、ついつい厳しい口調になる者も少なからずいる。

ここで1年生たちは怖い先輩とそうでない先輩を見切る観察眼を養っていると言っても過言ではないであろう。

灯輝も放課後に応援団の練習のため行かなければならなかったが、灯輝自身はこういった事は苦手ではなかった。

しかし、初めて出来た友人の新一郎はこの練習に乗り気ではなかった。

「あーあ……。何でこんな事しなきゃなんないんだろう……」

ため息混じりに不満を漏らす新一郎。そんな彼に灯輝は優しく語りかけた。

「大丈夫だつて。やってみなきゃわかんねえだろ？ とにかく行ってみようぜ、な？」

うなだれる新一郎を支えるように、灯輝は靴を履き替えグラウンドに出た。そこにはすでに数人の2年生が立っていた。

「おつ、来たな？ キミたちは早いね。まあ、みんな来るまでゆっくり待ってなよ」

一人の2年生が灯輝たちに声をかける。彼は意外にも穏やかそうな性格であった。

「ほら、見たろ？ 今の人すっげえ優しそうじゃなかよ。心配する事ねえつて」

未だ不安そうな顔をしていた新一郎に小声で囁く灯輝。新一郎も安心したのか、だんだんと表情が元に戻ってゆく。

「そろそろ全員揃ったかな……？ よーし、1年生集合！」

先程灯輝たちに声をかけた穏やかそうな2年生が1年生を召集する。先程とは幾分表情が厳しいものになってはいたが、灯輝はそれに気付かなかった。

「俺が団長の小澤です。今日から体育祭まで約3週間、みっちり練習するからね。なにしろ時間が無いから、君たちにはしっかりと練習に取り組んでもらわないと困るんだ」

（うわ……マジかよ。3週間で全部覚えろって？ こりゃ放課後なんもできねーかもな……）

「それと、必要に応じて放課後以外にも呼び出したり、休日返上で練習する事も考えられます。だから、いつでも練習に出られるように心の準備をしておくこと」

口調は優しいものの、声の張りからは厳しさが伝わってくる。やはりひとつの集団をまとめるだけはあるようだ。と、その時であった。

「返事！」

小澤の怒声が響く。返事を返さなかった1年生に向けられた厳しい声。思わず周りの2年生も驚くほどであった。

「は……はいっ！」

（おーこわ……。さすがだな……やっぱ）

心の中でそう思いながら灯輝も返事をする。しかし小澤はさらにかう返した。

「声が小さいよ！ 全然聞こえない！ それに、返事は『はい』じゃなくて『押忍』だ！ もう一度！」

「押忍！」

「まだ小さい！」

「押……忍……！」

「よし、そんな感じだ！ いつもそのくらいの声で返事をするように！ わかった！？」

「はい！」



「違つつてーの！！ 返事は『押忍』！」

「押忍！！！！！！」

「よーしー！」

こうして、ひとしきり声を出させた後、応援の型の練習が始まった。

「青春！ 青春じゃねえか！ くうつ！」

「おいおい、泣くなつて。大体読めてきたぞ……。その練習の後何かあつたんだろ？」

「まあまあ落ち着けや。結末はこれから話すからよ」

放課後に応援練習をするようになってから、はや1週間になろうとしていた。

今日もまたその練習のために、灯輝は新一郎を誘つてグラウンドへ出向いた。

グラウンドに着くやいなや、団長の小澤が灯輝たちに声をかけてきた。

「またキミたちが。どう？ 練習、厳しいかな」

友人と話すかのように優しく話しかける小澤。灯輝はこう返した。

「ええ、まあそれなりにはね。でも団長さすがですね。決める時はビシツと決める感じで」

「ありがとう。でも俺もね、結構つらい立場なわけ。わかる？ なつかなか型を覚えてくれない子もいるでしょ？ そういう子に合わせたら時間が足りなくなるのよ」

と、灯輝に不満を吐露する小澤。そんな彼は、新一郎の顔を見るとうとう言った。

「あんまり言いたくないけど、ぶっちゃけ一番覚え悪いのって、キミなんだよね。わかるでしょ？ 自分だけ遅れてるの」

どうやら小澤の悩みの種である、応援の型の覚えが悪い代表は新  
一郎のようだ。

「でさあ、どうなの？ やる気あんの？ ねえ」

そう言いながら新一郎に詰め寄る小澤。新一郎はうつむいてしま  
って、何も言い返せない。どうやら自分でも認めているらしい。

灯輝はその間に割り込むような形になった。

「ちょっと待って下さいよ。こいつばっか責めるのは良くねえっし  
よ？」

「あつ……。ゴメンゴメン！ そうだった。悪かった。確かに覚え  
が悪いのはキミだけじゃないから、キミだけ責めるのはよくないよ  
な。悪かった。ごめんよ、言い過ぎた」

灯輝の言葉に我に返り、新一郎に平謝りした小澤。自分でも行き  
過ぎた行動だと自覚したようだ。

「んじゃーさ、もうすぐ練習始めるから準備しといてね」

2人にその声をかけて、小澤は他の2年生のところに戻っていっ  
た。

「新一郎、気にするなよ？ 団長だって悪気があって言ったわけじ  
やなさそうだし。な？」

「う、うん……。でも、僕が覚えが悪いのは事実だからさ……。仕  
方ないよ」

「し、新一郎……」

自嘲的につぶやく新一郎に、灯輝も戸惑いを隠せなかった。

「じゃあ、今日は今までの成果を見せてもらおう！ うちらが見て判  
断するから、明らかにダメな奴はすぐチェックするよ！」

グラウンドに響く小澤の声。やはり先程、灯輝たちと話した時の  
声とは違う。

そして、練習が始まった。何人かのグループに分け、今までの成  
果を見せていく形のようだ。

次々と型をこなしていく1年生たち。ついに灯輝たちの番となっ

た。

「じゃあ、始め！」

小澤の号令で応援の型を始める灯輝のグループ。しかし、やはり新一郎だけは他の1年生に比べて明らかに出来が悪い。

すぐさま2年生のチエックが入ったのは言うまでもない。

「そこ、違つよ！ 遅れてる！」

このように何度かチエックが入ったものの、灯輝たちも一通りの型を終えた。

その日の練習終了の時、小澤がこう発表した。

「今日もお疲れ様でした！ 今日の発表で、だいぶみんなの覚え方に差が出てる事が分かりました」

全員に聞こえるように顔を動かしてはいるが、視線だけは明らかに新一郎に向けられている。

「もう日にちが無いから、遅れてる子にはそれなりの措置をとらせてもらうからそのつもりでいて欲しい！ 以上、解散！」

「ありがとーっした！」

練習開始当初とは比べ物にならないほどの大声で返事を返す1年生たち。その声に小澤も満足げの表情を浮かべていた。

その翌日の昼休み、食事を終えた灯輝と新一郎が、他の友人を交えながらいつものように他愛の無い会話をしていたところ、応援団の2年生がやってきた。

「そのメガネくん。ちよつと来て」

そういうと彼は、有無を言わず新一郎だけを連れて行ってしまった。

「あーあ……。あいつしごかれるなあ……」

「し、新一郎……」

新一郎が戻ってきた時には、すでに昼休みは終わっていた。

そんな日が続くようになったある日、灯輝は練習前の小澤に探りを入れた。

「団長……。新一郎のことなんですけど」

「誰のこと？ ああ、キミといつも一緒にいるあのメガネくん？

それがどうしたの？」

「どうしたもこうしたもねえよ！ あいつ、ここんとこ毎日昼休みにしごかれてるじゃんよ。何もそこまでしなくなつていいっしょ？」

「だからさ、これも仕方ないの。彼の覚えが悪いから、こうするしかないってわけ。わかる？」

「……」

彼が言う事ももつともだ。否定のできない灯輝は黙り込んでしまった。

新一郎は、相変わらず昼休みに呼び出しを喰らっていた。

そんな日が続いたせいか、元から細身の彼の体はさらに細くなつていった。

彼の身を案じた灯輝は、昼休みに呼び出された新一郎の後ろをこっそりついていく事にした。

もしかしたら、型の練習にかこつけて何かされているのではないかと心配しての行動である。

ひとり屋上のドアを開けた新一郎。灯輝は屋上のドアにはりつき、その窓から中を観察した。

少しではあるが、声も漏れ出していた。新一郎の声である事は間違いないさそうだ。

中の様子からは、数名の2年生に囲まれながら黙々と応援の型を披露している新一郎の姿が確認された。

特になにかされているわけでもなく、2年生たちも真剣に彼の動きを見ている。

どうやら、灯輝の心配は杞憂であったようだ。

少し安心した灯輝は胸をなでおろし、その場を立ち去ろうとした

……が、その時であった。

「ら……で……は……そん……だよ！」

「……い……んに……ろ！」

何やら言い争う声が不鮮明ながら聞こえてきたので、灯輝は慌てて中の様子をもう一度覗いてみた。

するとそこでは、新一郎を集団で暴行している光景が映し出された。

「新一郎！ ちくしょう、あいつら……」

灯輝はそのドアを開けようとした……が、鍵がかかっていたため開かない。

「くっそ……。こんなもの！ オラァ！！」

灯輝は渾身の力を込めてそのドアを蹴破った。

「お前ら……。応援練習させる為ってのはただの口実だったんだな！？」

そう言いながら2年生に詰め寄る灯輝。あまりの気迫に2年生たちも思わず後ずさりをする。幸い、新一郎の傷はまだ浅かった。

「新一郎……大丈夫か？ ごめんな、お前がこんなに苦しんでるのに気づいてやれなくて……」

新一郎に囁きかけた後、灯輝は鬼の形相で2年生たちを睨みつけた。

「てめえら……。先輩だからってそんなに偉いのかよ！ ええ！？ どうなんだ！！」

「そいつがあんまり覚えが遅いから呼び出しただけだ。団長も言っていたろ？ 覚えの悪い奴にはそれなりの措置をとるって」

「それなりの措置ってのはリンチなのかよ！ 団長はそんなこと望んでねーだろうがよ！」

「そつだよ。それなりの措置ってのはリンチだよ。小澤がそう指示したんだ」

「なっ……」

2年生の言葉に愕然とした灯輝。

あの人のよさそうな団長が、実はこのリンチの首謀者であった。その事實は、灯輝の想像を超越していた。そんな事、かけらも思わなかった。

灯輝は、今まで信じてきたものに裏切られた思いでいっぱいになっていた。

「あの野郎……許せねえ！ その前にまずはお前らだ！」

そう言うと共に灯輝は2年生に殴りかかった。怒りに任せて放つその拳は、一撃で彼らを倒すほどであった。

いとも簡単に2年生たちを倒した灯輝は新一郎にこう言った。

「俺は今から小澤の奴をブン殴ってくる！ お前は教室に戻ってろ！ わかったな！」

そして、一目散に諸悪の根源である小澤がいる教室へと向かっていった。

階段を駆け下りると灯輝は、小澤がいると思われる教室の前に立っていた。

「小澤あ！ いるんだろ！ 出てきやがれ！！」

大声で小澤を呼ぶ灯輝。何事かと生徒達が集まり始めた。その中には小澤本人もいた。

「どうしたんだ？ そんな大声出して……」

小澤は落ち着き払った表情で灯輝に語りかける。しかし灯輝は、そんな彼の胸倉を掴みながらこう問い詰めた。

「どうしたもこうしたも！ 昼休みの応援練習はリンチだったんだろ！ 俺は見たんだよ、新一郎が先輩どもにボコされてる現場を！」  
「それが俺と何の関係があるってんだ？」

「てめえ……。ここまで来てしらばつくれるつもりか？ 俺は確かにあいつらから聞いた。お前の差し金だつて事をな！」

「はあ……。あいつら喋っちまったんだ……。ま、でもね、これは毎年のことだから。言うなれば伝統つてやつ？」

ようやく口を割った小澤。しかしその態度に謝罪の気持ちは全く

無い。

「俺は応援団の団長としての責任があるから、仕方なくこうしただけであって、決していじめでやってるわけじゃないんだよ。そこを勘違いしてもらっちゃ困るな」

「よくも現場を見ないでそんな事が言えたもんだな。あれは誰がどう見てもいじめだったぞ！」

変わる事のない小澤の態度に、灯輝の腕にも力が入る。しかし彼はそれでも動じる事はない。

「とりあえずさ、落ち着いて話し合おうよ。そろそろ苦しくなってきたからさ。この腕放してもらえないかな？」

「わかったよ。放してやるよこの野郎！」

語尾を荒げながら、灯輝は小澤の胸倉を掴んでいた腕を放した。

しかし傍目には、その行為は床に叩き付けたようにしか見えなかった。

「おーいててて……。ったく、毎年いるらしいんだよなあ、こういう風に勘違いしちゃうおバカさん。ま、キミもそのうちの一人ってことだよ。わかるかい？」

叩き付けられた事で服についた埃を払いながら小澤が言う。確実に灯輝を挑発しているようだ。

「ど……どこまで人をコケにすれば気が済むんだ……！ 絶対許さねえ！ うおおあああああ！」

ドゴオアッ！

怒りが最大限に達した灯輝は、渾身の力を込めて小澤の腹部を一蹴した。

その勢いで教室内に吹き飛ばされていく小澤は、いくつかの机にぶつかる事でようやく止まった。

しかし、灯輝の怒りは収まらない。完全に我を忘れているようだ。さらに数発殴りつけ、ついに椅子に手が伸ばされた。

そして、すでに無抵抗状態の彼にその椅子を勢い良く振り下ろす  
うとしたその刹那……。

「……ってオイ！ 途中で話を止めるなよ！ それでどうしたんだ  
よ！？」

「てか、お前が行ってた学校最低だな。応援練習はいいとしても、  
できねー奴をボコるってないわ。それを伝統で片付けるんじゃない  
よ。上達度ってのは人それぞれだろがよ……」

「だろ？ 普通に学校選択間違っただよ……。お、悪い悪い。話の続  
きな」

小澤に向かって勢い良く椅子を振り下ろそうとしたその刹那、周  
りの2年生がそれを阻んだ。

どうやら彼らは、屋上において灯輝に殴られた応援団の幹部たち  
のようだ。

彼らに止められる事でようやく落ち着きを取り戻した灯輝。

冷静になった彼の目に映ったのは、傷つき倒れた小澤の姿だった。

「あ……ああ……」

脱力し、その場にくずおれる灯輝。自分がやってしまった事の重  
大さに気付いたようだ。

そこに、騒ぎを聞きつけたと思われる教師数名が駆けつけた。彼  
らの視線は、自然と騒ぎの中心にいる灯輝たちに向けられる事とな  
った。

「お前ら！ 職員室まで来て、このことについて詳しく話してもら  
うからな！」

教師の声が低く響く。言われるがままに職員室に向かう彼らであ  
った。



「さて、どうしてこのようなことになってしまったか、詳しく説明してもらいましょうか……」

何故か彼らは校長と対面していた。職員室に連れて行かれたはずだが、そこを通り越して校長室に連れ込まれていたのだ。

校長は惘然とした表情で、彼らを見回していた。まず始めに口を開いたのは灯輝であった。

「先輩たちが悪いんですよ！ 応援の型の覚えが悪いからって昼休みとか放課後とか朝っぱらとかに、新……じゃない、霧原を呼び出して練習させたから！」

灯輝はさらに続けた。

「特別練習自体は悪い事じゃないけど、それにかこつけて集団でボコにするのはどう考えても許される事じゃないだろうよ！」

灯輝の言葉がもつともだと思っっているのか、2年生たちは何も口に出そうとはしない。

だが、傍らにいた教頭が驚くべき言葉を発したのだ。

「しかしだね、この応援団……ならばに応援団の練習は、この学校の伝統として毎年続いてきたんだよ」

「いや、それはわかってますよ。でもリンチは……」

「例えそんな事があつたとしても証拠がない。現に今だつてそうだ。君の言葉だけでは、こちらとしても信用するわけにはいかない」

その言葉に触発されてか、今まで黙りこくっていた2年生が一斉に口を開いた。

「そつだそつだ！ 俺たちは伝統に従つてるだけだ！ 体育祭までに全員が同じように出来なきゃこつちとしても示しがかねーだろ！ 厳しくなるのは仕方ない！」

「それに、お前は殴つたつつつてるけど、背中とか肩叩いて激励しただけだ！ 『もう少しだから頑張れ』ってな！」

「て、てめえら……っ！」

「はいはい、静かにしなさい！ ……しかし、君達の話には食い違いが生じているようですね。どちらが正しいのですか？」

と、校長は尋ねた。愚問である。これでは双方とも正しいと主張するばかりであり、何の解決にもなりはしない。

やはり、灯輝も2年生も、自分が正しいとの一点張りであった。

その空気の中、教頭がまたも驚くべき言葉を発したのだ。

「私個人の意見としましては、非があるのは入沢の方だと思いますが……」

あまりにも衝撃的な言葉。突然非があると言われた灯輝は驚くしか出来なかった。

校長は、教頭に理由を尋ね始めた。教頭はこう語った。

「今の問題は、2年生の教室で大暴れしていた入沢にあるでしょう。理由が応援団の特別練習にあったとしても、明確な理由にはなりえません」

「な……なんでだよ……！ あんたおかしいよ……」

「それを理由にする事は、我が校の伝統を否定している事にもなりますからね。校長、我が校の伝統に従えない者の言う事など聞く必要ありませんよ」

どうやら教頭は、伝統を重んじる性格のようだ。

『応援団の練習』という伝統を否定したような灯輝の行動に腹を立てているらしく、聞き方によっては自主退学を促すかのような言葉を発したのだ。

校長のほうも納得したような表情でこう語った。

「そうですね……。校内で暴力事件が起こった事が世間に知れると、我が校の評判にも関わりますからね」

そこまで校長が話した後、灯輝はようやく口を開いた。

「ああそうかよ。お前ら、この事件を無かった事にするつもりだな？　そんでもって、あわよくば俺も退学処分にするつもりなんだろ？　そうだろ？」

全てを見透かしたかのように灯輝が言う。

「そこまでは言っていない。勝手な解釈をされては困るよ」

「言ってるようなもんじゃねーか！　わかったよ。こんなクソ学校、

言われなくても辞めてやるよ！ 伝統って言つときゃ何でも許されるような風に言いやがって！ ざけんじゃねえ！！」

そう言い放ちながら灯輝は立ち上がった。

「待ちなさい！ まだ話は終わってませんよ！」

「うるっせーよクソジジイ！ もう俺はこんな学校とは関係ない！ 待つてる、明日退学届を郵送してやるからな！」

そう言いながらドアのほうへ向かった灯輝は、怒りに任せてドアを蹴り開けた。

そのあまりの衝撃で、ドアのちょうつがいが外れてしまった。

自分のカバンを取りに行くために教室に戻った灯輝。そこには新一郎が戻っていた。

「入沢くん……。さっきはありがとう……」

「いいって、気にすんなよ」

「おい灯輝……。お前先輩達を殴ったんだって？ 全部こいつから聞いたぞ？」

「ん？ ああ、そうだよ。だから、俺学校辞めるわ」

「えっ……？ 入沢くん、学校辞めちゃうの？ 僕のせい……？」

「お前のせいなわけねーって。頭来たからこっちから辞めてやるっつったのさ」

「……」

「大丈夫。お前には俺以外にもダチいるだろ？ 俺がいなくても大丈夫だよ。お前らも、新一郎のことよろしく頼んだぜ」

「ちよつと待ってって！ 何で辞めんだよ！ 理由も言えねえのか！？」

「理由……？ 俺がこの学校の伝統に従えないからだ。先公も『伝統に従えない者はこの学校には必要ない』みたいに言ってたし」

「……」

「これで充分だろ？ 長居するわけにもいかねーし、もう行くわ。じゃーな！ 短い間だったけど楽しかったぜ！」



「そうか……。ここ昔から危ないところだって噂だからな。もう通  
るのやめようぜ」

「そうだな……。でもあの不良、昔どっかで見たことあるような気  
が……」

「そろそろ、またカモ狩りに行くか？」

「そうだな。じゃあな灯輝！ 期待してるよ！ 今度はいいカモ連  
れてくるからな！」

「オツケー。待ってんぜ」

こうして、再び彼らはここを通る人間を探しに行った。

灯輝がこの一連の恐喝行為から足を洗うのは、まだもう少し先の  
ことであった……。

## 過去話4：卒業式

「へーくしょん！ あゝ、辛い。全く……、何でまたこんな日に学校行かなきゃなんねえんだよ……」

「今日は卒業式だからしょうがないよ。でも大丈夫？ 灯夜兄」

「大丈夫だったらこんな泣き言ほざいてな……どえーくしょん！」

朝から豪快な灯夜のクシャミが街中に響き渡る。

彼は重度の花粉症のため、ここ最近では学校以外の外出を避けていたが、この日は彼らの通う高校の卒業式の日であったために外出を余儀なくされた。

普段から睡眠時間は常人より多くとっているはずの彼も、花粉症で鼻が詰まっているために最近では睡眠不足らしい。

当然、この日もその例に漏れる事は無く、より一層眠そうな表情を浮かべていた。

「なあ音遠？ 俺、式の途中寝るからよろしく」

「そんなのダメだよ！ まったくう」

そんな会話を続けているうちに、2人は学校に到着していた。どうやら、まだ少し早かったようなので来ていた人数は数えるほどしかいなかった。

「ちよつと早く来すぎちゃったかな？ あんまりいないねー」

「そうだな……。まさか、俺らが来る時間を間違えちまったとかそういうのねえだろうな？」

「それはないと思うよー。先生もこの時間でいいって言ってたし」

「どうだかねえ。あの先生まだ教師歴短いだろ？ 自分の受け持ったクラスを卒業させるのも初めてだろうし」

「そりゃそーだけとお……。でも私はこれでいいと思うよ？」

「ま、とりあえず待ってみようぜ。どーせすぐ来ると思うし」

それから10分程度経った頃……灯夜の予想通り、教室は少しずつ賑わってきた。

教室内は写真撮影を始める者、先日もらった卒業文集に寄せ書きをする者と様々であった。

中には、もう既に感極まって泣き始める生徒もいた。

「おーおー。もう泣いてやがるぜ。いくら何でも早すぎだろ？ なあ音遠？」

「……」

呼びかけたにも関わらず、音遠の返事はない。

灯夜が訝しげに彼女の顔を覗き込んでみたところ……そこには大きな瞳に涙を浮かべる音遠の姿があった。

「って、お前もかよっ！ ったく、気が早いつてーか何てーか……」  
冗談交じりに灯夜がそう言つと、彼女は肩を震わせ、そして……爆ぜた。

「うっ……うっ……うわああああん！！」  
教室内に響く音遠の泣き声。どうやら、彼女も既に感極まっていたようだ。

一番近くでその声を聞いた灯夜は、驚きのあまり座っていた椅子から倒れてしまっていた。

その後、その声を中心とした人垣が出来た事は言うまでもないだろう。さらに、そこから灯夜に対して非難の声が挙がってゆく。

「灯夜てめえ！ 俺らのアイドル音遠ちゃんを泣かしやがったな！ どう責任取ってくれるんだ！？」

「何いじめてるのよ！ 弱い者いじめなんて最低よ！」

「お前は兄貴失格だ！ 俺が代わりにお兄ちゃんになってやるから、お前はどっか行ってよし！」

当然、これらの言葉に悪気などない。皆、2人が仲良くしているのが羨ましいからなのだ。

灯夜の方もそれを分かっているようで、倒れた椅子を直しながらこう言うのだった。

「うつせ。俺が泣かしたんじゃねーっての！ こいつが勝手に泣き始めたんだって。今日は卒業式だししょーがねーべ？」

だが、音遠はまだ泣き続けていた。

さすがにばつが悪くなつたか、灯夜は彼女の頬に手を差し伸べながら優しく語りかける。

「ほら、もう泣くなよ。涙は式が終わるまでとっところうぜ、な？」

「うん……ありがとう灯夜兄……」

灯夜の言葉で、ようやく落ち着きを取り戻した音遠であった。それから、周囲の人垣がまばらになつた事は言うまでもない。

何分か過ぎた後、卒業式会場である体育館への入場が始まった。

2人はクラスが違うので、ここでひとまず別れる事になる。

「じゃあまた後でね」

「ああ。さつきみたいに大泣きすんなよ？ こつちが恥ずくなつからよ」

「むうう！ しないもーん！ 灯夜兄こそ寝ちゃダメだからね！？」

「残念だな。俺は言った事は守る男だ。来る途中、俺は確かに『寝る』って言ったはずだ。ならば寝るのが筋つてなもんだろっ？」

「あうう……。灯夜兄がいぢめるよお……」

2人は時間いっぱいまでこんな会話を続けていたのだ。

しかし、ようやく教師の視線が痛くなつてきたのか、音遠は自分のクラスに戻っていった。

入場までまだ時間があったので、灯夜は友人と会話していた。

「やっと卒業だなあ……。つかオレ、マジで卒業できて嬉しいんだけど」

「ほう？ ならば俺に感謝しやがれ。俺のありがたーい支えがなければ、貴様など留年確定だったのだからな」

「ははーっ、おっしゃる通りです灯夜様！ 貴方様を是非『お兄様』と呼ばせてください！」



「待ちやがれ奇跡的馬鹿。なんだその『お兄様』つてのは!？」

灯夜がそこまで言うと、その友人は表情を一変させた。

「灯夜……、折り入って頼みがある。オレと……音遠ちゃんの間際を認めてくれ！」

「はあ!？ はあ!？ はああ!？ 前々からアホだアホだとは思っていたが、ここまで救いようがないとは思わなかったぜ！ そんなこと俺に言つてどうするよ？ 本人に直接言えつての」

「ば……バツカヤロー！ 面と向かつて言えるかよ！ だから、お前の方からさりげなく言つて欲しいんだよ」

「嫌デース。直接言う事も出来ない奴は救いようがありません」

「……わーかったよ！ じゃあ式が終わったら直接言つてやらー！」

「おお、その意気だ！ ま、せいぜい頑張つてくれたまえ！」

そう言いながら、灯夜は友人……森野翔司の肩を叩く。

彼は灯夜の悪友兼親友で、いつも2人で組んでクラス内をいい意味でも悪い意味でも引つ掻き回していたのだ。

そんな彼は、どうやら音遠に一目惚れしてしまったらしい。

いつか自分の気持ちを伝えようと思つていながら、それを実行できずにこの日まで来てしまったため、内心焦っているようだ。

「卒業生、入場！」

体育館の奥から響く声。卒業式の始まりを告げる声である。皆一様に噛みしめるように自分の指定された座席へと向かう。

担任教師の合図で、一斉に座る一同。前日行われた練習よりも、それぞれの動きはしっかりとしたものであった。

式は淡々と進み、ついに卒業証書授与が始まる。

だが、大抵の高等学校は小学・中学とは異なり、一人一人に証書を授与するのではなく、クラスの代表者数名が代表して壇上に上がるといふ形式を取っている。

ここもその例に漏れず、式の中で実際に授与される生徒は各クラス2名ずつであった。それ以外の生徒は、ただ名前が呼ばれるだけ

だ。

しかし、それだけではつまらないと思ったのか、密かにどう返事を返そうか試行錯誤する者もいた。

灯夜や翔司もまた、そのような考えを持っている者の一部のようにだ。

そして、いよいよ灯夜のクラスであるD組の生徒の名前が呼ばれる番になった。

(さくで、いよいよだな……。よお、お前はどうするよ?)

(いや……。やっぱりオレ普通に返事するわ)

灯夜は小声で、隣に座っていた友人と相談していた。

(そうかよ……。まあいいや。あと5人か……。何にするかな……。って、やべえ！ こんな時に鼻がむずがゆくなりやがった！)

先ほど友人と話した際に一時的に緊張状態から抜け出した形となった為であろうか、灯夜に再び花粉症の兆候が現れていた。

(何だってまたこんな時に……。ダメだ、抑えられねえ！ は……。はっ……)

少しずつ、だが確実に近づく、自分の名前が呼ばれるその瞬間。彼が今にも噴出しそうな状況まで陥ってしまったその時……。

「水嶋と……」

「ふえぶほうわつくしよー！ー！ーん！！ あーちくしよー！ー！ー！ー」

静寂を打ち破る盛大なる爆音。灯夜は、我慢できずに噴出してしまったのだ。しかも、自分の名前が呼ばれている最中に。

一瞬の沈黙ののち、湧き上がる笑い声。当然それは灯夜に向けられていた。

反対側の女子の席では、音遠がうつむきながら必死に笑いをこらえている姿が確認された。

(灯夜のヤツ、やってくれるじゃねーか！ よっしゃオレも負けてらんねーぜ！)

灯夜の行動に触発されたのか、翔司は心の中で決意を固めたようだ。そして……

「森野翔司！」

「Y a a a a a a a a a a a a a a a a ! ! ! ! !」

再び起こる沈黙の中で、ひとり恍惚の表情を浮かべる翔司であった。

しかし、彼には冷たい視線が向けられるだけであった。よほど先程の灯夜のクシャミはインパクトが強かったのだろう。

(す……滑った……！)

彼の自尊心は今、派手に傷ついた。

灯夜は直立しながらもうなだれる彼を見ながらこう呟く。

(バーカ。こんなんじゃ音遠にも嫌われるだろーよ)

そこからは滞りなく名前が呼ばれて行き、ようやく音遠のクラスであるE組の生徒の名前が呼ばれる事になった。

(灯夜兄つたらもう！ こっちが恥ずかしいじゃない！ ……でも、あんなふうに注目されるのも悪くないかなあ？ よーし！ 私も真似しちゃおっと)

音遠がそう思った次の瞬間……。

「水嶋音遠！」

名前が呼ばれてしまった。だが彼女はどう返事すべきかを決めていなかった。

慌てて立ち上がり、口にした言葉は……。

「えっ！？ あ……、はい！ はい！ いますいます！ 遅刻にしないでー！」

またも起こる沈黙。どう考えても、この席でこのような返事をする者などいるはずがない。

名前を呼んだ教師も戸惑いを隠せず、次の生徒の名前を呼ぶ事をしばし忘れていたほどだ。

その沈黙を打ち破ったのは、一人の男子生徒のこんな言葉であつ

た。

「あーっもう！ かわいいなちつくしょー！」

声の主は翔司であろうか。おそらくそうであろう。

その言葉を皮切りに、何故か拍手が沸き起こる。その拍手の中には『そうだそうだ！』だの『よく言った！』だのといった賞賛の声が混ざっていた。

当の音遠は、幾分顔を赤らめながらうつむいていた。

（ったく……。俺よつかおいしい所持って行きやがって音遠のヤツ……。くそ、羨ましい）

灯夜がこう思い始めた頃、教師は再び卒業生の名前を呼び始めた。その声は若干上ずっていたのだが。

それからしばらくして、ようやく卒業式が終わった。続々と卒業生が退場してゆく。

女子を中心に感極まって涙を見せる者も多かったが、そんな彼らを誰が笑う事が出来ようか。

やはり音遠も、その中の一人であった。式が始まる前に既に涙を見せていたほどだから、当然の如く泣きながら退場をする事になった。

灯夜は音遠よりも先に退場を済ませており、中庭で友人達と合流していた。

「さすがだよな灯夜よお。よくやったぜホントに」

「ホントホント。ビックリしたぜマジで」

「なあ……。オレは？ オレもはっちゃけたんだぜ！？ 聞いてたろ？ オレの魂の雄叫び！」

「バーカ。何が魂の雄叫びだよ。俺の後にやってもしよーがねーだろが。ま、恨むんなら自分の出席番号を恨むんだな」

「くっそー……。あれ？ 音遠ちゃん？」

「ん？ 音遠がどうした？」

「いや……。後ろ……。灯夜、お前の後ろ」

「後ろ……?」

友人達に促されながら、後ろを振り向いた灯夜。そこには泣きはらして瞳を真っ赤に染めた音遠の姿があった。

「灯夜兄……。うつ……。うわああああん!!」

数時間ぶりに灯夜に出会えたことで安心したのか、音遠は再度号泣してしまった。

その声にいち早く反応したのは灯夜ではなく、翔司であった。彼は半ば灯夜を押しつけるように音遠の目の前に立つてこう言う。

「音遠ちゃん、どうしたんだい? 君には涙は似合わないよ……」

ほら、ボクの胸の中においで……」

傍で聞いていると、あまりにも芝居じみた言葉である。まるで事前に考えてきたかのようにもあつた。

「うつわ、くつせえ! くつせえよ翔司!」

「ぼ、ボクだあ!? ケーッ! アッホらし!」

「ムダだな……。こいつぁ重症だ。俺らが何言っても聞きやしねえ。音遠次第だな……」

翔司は先程自分が言った台詞に酔っているのか、恍惚の表情を浮かべている。音遠の返事を待っているのだろう。

しかし、彼女の返事は翔司の思い描くものとは大きくかけ離れていた。

「えぐつ、灯夜兄じゃなきやヤダよう……。くすん」

「はぁ……。やつばな……」

「音遠ちゃんは兄貴至上主義つてヤツか……。こりゃダメだわ。他のヤツには介入の余地すらねえやな」

「そんな……。バカな……。オレつて一体何だったんだ……?」

「ほら灯夜兄さんよお! かわいい妹をそのまま泣かせていいのか?」

「オレらはなーんも言わねーから、優しく抱きしめてやれよ!」

「て、てめえら……。他人事だと思って……」

しぶしぶ灯夜は音遠の元へ歩み寄った。すると、音遠は彼にしが

み付くように抱きつくのだった。

「ホントに卒業しちゃったんだよ……？　もうみんなと会えないんだよ……？　あうう、そんなのヤダよう……」

「バーカ。何言ってるんだよ。卒業したからつてもう2度と会えなくなるわけじゃねーだろ？　毎日教室で顔合わせる事がなくなるだけだろーがよ。そんな事、いつからお前が救いようのないアホだとしてもわかるだろ？　ほら、もう泣くなつて。な？」

「ぎゅってして……」

「へ？」

「ぎゅってしてなの……」

「灯夜！　抱きしめてって事だろうよ！　男だろ！　それに兄貴だろ！」

「くっそ、あとで覚えとけよ！　わかったよ……こうすればいいんだろ……？」

そう言つと灯夜は、彼女を優しく、しかし強く抱きしめた。

ほぼ全ての卒業生が取り囲む中、2人の距離は限りなく近づいていったのだ。

「灯夜兄……大好き」

「はいはい……。もう何度も聞きました」

「いつまでも大好きだからね……。ずーっと、ずーっと……」

2人を包む風は、暖かかった。

「よお灯夜！　お前これからヒマか？　なら遊びに行こうぜ！　カラオケなんかどうよ？」

卒業式が終わり、教室に戻った灯夜に翔司が話しかけた。これから遊びに行こうと彼を誘うためだ。

「ん……、多分ヒマだろう。よっしゃ、その話乗った！」

「よしよし。これで4人になったな」

「あ、4人だったの？　人数的にも丁度いいな」

「だろ？ じゃー早速行こうぜ！」

そう言いながら翔司は灯夜を引っ張るように教室を出ようとしたが、音遠に見つかってしまった。

「あーっ！ 森野くん！ 灯夜兄どこに連れてっちゃうの〜？」

「はあ……。見つかっちゃったか？」

「音遠ちゃんゴメンな！ 灯夜はオレらと遊ぶ約束したからさー」

「私も行きたいー！ ねえいいでしょ〜？」

「いやダメだ。今日は男だけの集まりだからダメ！」

「むっつ！ ケチー！」

「まあそうむくれるなって。男同士の付き合いってのもあるんだよ。だからお前は先帰れ。ほれほれ」

「むっつむっつ！ いいもーん！ 私も女の子だけで遊びに行っちゃもーん！ もーん！！」

「勝手にしろ。んじゃ俺らは行くからな！」

「早く帰ってきてね……。？」

「知らん」

その言葉を残し、足早にその場を去る2人であった。

「翔司……。よく頑張った。偉いぞ！」

「あ、ああ……。気まずいもんな、音遠ちゃんがいると……。さっき告白まがいの事したからさあ……」

「今日は思う存分お前のグチを聞いてやるからな！ 元気出せって！ 女なんて星の数ほどいるんだからな！」

そのような会話をしているうちに、灯夜たちは先に玄関に出ていたもう2人と合流した。

「よお、待ったか？」

「うんにゃ別に。で、何処行くよ？」

「そのカラオケでもいいけどさあ、絶対混むだろ？ 今日なんか特に」

「あー……。じゃさ、俺の地元のカラオケ行かねえ？」

「そうだな、そこならそんなに遠くねえし」

「んじゃそこだな。よし！ じゃあ行くか！」

4人は、目的地を3駅離れた場所にして、灯夜たちの地元駅に定めた。

駅周辺の路地裏では不良がたむろしてはいるが、外観から言えばわりと穏やかな街並である。

「……………で？ 何処にカラオケあるんだよ？」

「あー、こっちこっち。近道するからな」

「え？ ちよつと待ってって灯夜！ 路地裏通るのか？」

「は？ そうだけど？ 何でそんなビビってんだよ？」

「やめとこーぜ！ ここヤバいんだろ？」

「大丈夫だって。俺について来いや！」

「ホントかよ……………」

灯夜以外は全く乗り気ではなかった。

無理もない。ここは不良の溜まり場であり、地元の間人はどんなに近道であろうとここを使う事はなかったのだ。

建物のすきまを縫うように進む4人。しかし……………、彼らの前に、

見るからに柄の悪い男2人が立ちはだかった。

「おーつとカモ発見！ 君ら、ちよーつと俺らに付き合ってもらえないかな？」

やけに馴れ馴れしく彼らに詰め寄るその不良。しかし灯夜は全く動じる事もなく不良に話しかけていた。

「まーだこんな事してんのかよお前ら？ で？ 灯輝はいるのか？」

「あ、兄者さんか！ 何だよー、暗くてよくわかんなかったぜ。あいつならもうバイト行ったぞ」

「そっか、あいつも頑張ってるなあ……………。お前らもいい加減こんな事からは足洗えよ！」

「へいへい。いつかはね……………。あ、ここは通っちゃっていいツスよ」

「当然だろ？ んじゃ遠慮なく」

「どーもすいやせん。あんた方が兄者さんのお友達とは知らなくっ



て……。どぞどぞ、お通りくださいませ」

「は、はあ……。どうも」

足早にその場から去ろうとする、灯夜を除く3人。灯夜はと言うと、すまし顔で歩いていった。

「おいおい灯夜！ 何なんだありや？ 何だつてまたお前はあんな不良みたいな奴らと仲良く話し合ってたの！？」

「あー、あいつらは俺の弟の仲間。みたいなじゃなくてモノホンの不良だけだな」

「弟って……。いたんだ。お前のキョーダイ、音遠ちゃんだけじゃなかったんだ……」

「ああ。俺ら三つ子。言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてはいたけど、弟くんだけは見た事ないなあ……」

「俺よりワイルドだぜ？ 今度紹介しようか？」

「今度な今度。それよか今はカラオケだ！ 何処なんだよ？」

「ん？ ここだけど？」

「おお、いつの間……」

どうやら話しながら歩いていくうちに到着してしまったようだ。

早速4人は中に入る事にした。

店内の待合室には、すでに男女合わせて6人のグループが待機している。どうやら彼らも、部屋が空くのを待っているようだ。

「まいったなあ……。もうちょっと待つ事になりそうだ」

「まあいいじゃん。時間はまだあるんだし」

「じゃ、申し込んでくるわ。俺の名前で書きちゃうぞ？ ほれ、生徒手帳貸せ」

そう言って、他の3人から生徒手帳を預かった灯夜はカウンターへと向かう。

手続きを終えた後、4人は他愛の無い会話を始めた。今日の卒業式、これからの進路、果ては恋愛のことについても。

しばしの時が流れた後、灯夜たちより先に待っていた6人組が呼ばれ、店員に先導されながら部屋へと移動していく。

「あーちくしょー。あのグループいいなー。男3人と女の子も3人いて……。なあ灯夜？」

「文句言ったって。あれ……？ あいつら何人を見たことあるような……。気のせいかな？」

「なんだ？ 誰か知り合いでもいたか？」

「ん……。気のせいだと思う」

「何だよー。お前の知り合いだったら同席オツケーかと思ったのに。ちえ、残念」

「ねえ和也くん？ さっきの人たちの中に知ってる人いなかった？」

「え？ いや、よく見てなかったから知らないけど……？」

「なになに？ ボクたちの知ってる人でもいたの？」

「そんなのどうだってよくねえ？ 何でそんなに他人が気になるんだよ」

「ちょっとシュウ！ アンタなんてこと言うのよ！ ホント、 안타ってアレねー。思いやりがないって言うか、優しさが無いって言うか……」

「はあ？ 別にいいだろそんな事。俺の勝手だ」

「はっははは。まーた始まったか。諦めろみさき。こうなっちまったシュウはオレらが何言っても聞きやしないから」

「アタシはシュウの将来が真剣に心配よ。そんな性格じゃいつかきつと後悔するわよー？」

「ボクがいつか……、そんなシュウくんの性格を変えてあげられたらいいかなあ……」

「ん？ 芽衣ちゃん、何か言った？」

「あつ、圭輔くん聞こえちゃった？ 何でも無いの！ 聞かなかつた事にしといて！ ね？」

「う、うん……。(どういう事だ？ まさか芽衣ちゃん、シュウの

事を……？)」

4時間後、すっかり羽目を外した灯夜達が店内から出てくると、辺りはすっかり暗くなっていた。

「いやー、歌った歌った。こんな長い時間カラオケしたの初めてだぜ」

「てかな灯夜。お前鼻声過ぎ！ 聞いてて気分悪くなった！」

「俺に言うな！ 杉の木に言え！ 翔司こそ何だよアレは！ 『音遠ちゃんかんばーつく！』って！」

「うっせー！ もうどうにでもなっちまえ！ よーしこれから飲みに行くぜヤローども！」

「はいはい、落ち着きやがれこの人類史始まって以来の類稀なる馬鹿。ガクラン姿で居酒屋なんて入れてもらえるわけねーだろが」

「翔司のヤツ……、すっかりやけっぱちになっただんな」

「ま、こーしてバカやってられるのももう少なくなるもんな……。ああしたくなる気持ちもわかるよ」

「あつ……。そつか……。そうだよなあ……。卒業しちゃったから、こうしてお前らと会う事も自然と少なくなっていくんだなあ……。そう考えると寂しくなるな……」

「音遠があんなに泣いた気持ちも今ならわからなくもないな……。俺、あいつに酷いこと言っただけか……。あいつの気持ちも考えねえで」

「……灯夜。そう思うなら、今からあの娘の所に行っちゃれ」

「そうだな。それが兄として、何より男としてのけじめだと思う」

「お前ら……。ありがとう。わかったよ、俺、今から行ってやるよ……！」

「ああ！ 行ってこい！」

「じゃあお先に！ それと……。俺らはいつまでも友達だからな！ また会おうぜ！……」

灯夜はそう言うと、一目散に駅の方角へと走り抜けていった。

妹の所へ。自分を愛してくれている音遠の所へ。

「はあ……はあ……。まずはどこに行くか……」

肩で息をしながら考えを巡らせる灯夜。駆け出した方がいいが、肝心の音遠の居場所が掴めていなかった。

彼女の携帯に電話をしても、『電源を切っているか、電波の届かないところにいる』と機械的な声で知らされるだけであった。

「ったく……。何だつてこんな時に電源切つてやがんだよアイツ……」

悪態をつきながら辺りを見回す灯夜。

すると……駅の切符売り場に一人佇む小柄な少女の姿があった。それは間違いなく音遠本人であった。

すっかり日が暮れてしまったこの時間帯、3月も中旬に差し掛かつてはいたがまだまだ夜は寒い。

そんな中でコートも着ずに、制服姿で立ちつくしていた彼女の姿は、灯夜の眼にはとても弱々しい物として映し出されていた。

灯夜は、やや重めの足取りで彼女の元へ歩み寄る。そして、こう声をかけた。

「よお音遠。こんな所で何やってんだ？」

普段と変わらぬ、飾り気のない言葉。しかし音遠には、それだけでも充分であったのだ。

「あつ、灯夜兄！ まだ帰ってなかったんだ」

「ああ……。さっきまでカラオケやってバカ騒ぎしてた。で？ 何でお前はこんな所に突っ立ってんだ？」

「私はね……。想い人を待ってたの」

「想い人……？ 誰だよそれ」

「……」

灯夜が聞くと、彼女は何故かうつむいてしまった。聞かれなくなかった事なのだろうか。

やや慌てながら灯夜がこう続ける。

「あつ、悪い……。言いたくなけりゃいいんだよ……。そうだよな、そういうこたあ秘密にしときてえよなあ？ はは……」

苦笑する灯夜。しかしその時……音遠が無言のまま彼にしがみ付いてきた。

「私の想い人は……あなたです……」

普段と違う、妙にかしこまった口調に驚く灯夜。しかし音遠はさらに続ける。

「ずっと……ずっと……灯夜兄と一緒にいたいの！！ うっ、うっ……」

灯夜にしがみついたまま嗚咽を漏らす音遠。

彼女の想いは、もはや『兄』としての彼に向けられているものではなく、確実に一人の『男子』としての彼に向けられていた。

そんな健気な彼女を、灯夜は包み込むように抱きしめる。

「悪かった……すまん。いつもお前に酷いこと言っちゃまって……。これで許してくれるか……？」

そう言うつと灯夜は、彼女の唇に口づけをした。

同時に、音遠の大きな瞳からは大粒の涙がとめどなく溢れてくる。

この日だけで彼女は、一体どれだけの涙を流した事だろう。

それは音遠本人にもわからない事ではあつたが、そのどれもが他の何よりも価値のある、純粹で美しいものである事は間違いないだろう。

周りの視線にも気を取られることもなく、2人の距離はゼロになった。

常人にはあつという間に過ぎ去ってゆく時間も、彼らには『永遠』のようでもあつた。

その『永遠』のキスの後、彼らは手をつなぎながら駅構内へと姿を消した。

「灯夜兄……？」

「ん……？ 何だ？」

「いつまでも……一緒だよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1467o/>

---

Missing Hearts

2011年1月11日23時13分発行